

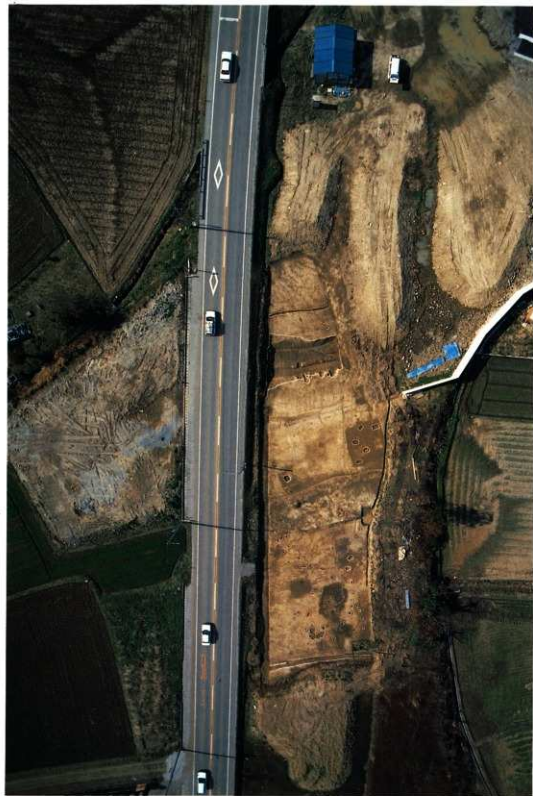
一般国道10号線

宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

笠松遺跡

1993年3月

大分県教育委員会



奥州圏版 釜淵池南Ⅱ区 (手前が北)

序

大分県教育委員会は、昭和62年から国道10号線宇佐道路建設に伴い埋蔵文化財の調査を実施しております。宇佐道路は、すでに完成した中津バイパスに連続し、さらに宇佐別府道路と繋がり大分へ伸びる高規格道路として計画されたものです。

工事に先立つ調査では、中津バイパスと同様に多くの遺跡が明らかになりました。発見された遺跡は、住居跡、墓地、溝など多様なものがあり、貴重な遺物を豊富に含んでおりました。これは、当時の生活や社会を知る上で大きな成果と言えるものです。

このような発掘調査の成果につきましては、今年度から順次報告書を刊行していく予定であり、今年度は、笠松遺跡の報告です。本書を通して、文化財に対するご理解をいただくとともに、学術的な貢献ができれば幸いです。

最後に、調査のご指導をいただきました諸先生方をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位および地元の方々に対し、深く敬意を表すとともに、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

大分県教育委員会

教育長 宮本高志

例 言

- 1 本報告は一般国道10号宇佐道路（笠松）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆者は次のとおりである。

第1、2、3、4、6章

小林 昭彦

第5章

田中 良之

- 4 遺物の実測、トレース、写真撮影などの作業は、小林、吉武牧子、安倍聡子が主体になり、あるいは補佐して行った。

英文要旨は和歌山県今福教会のFR. Leonard R. Lavalleeに添削など全面的な指導を受けた。

- 5 本書の編集は、小林昭彦が行った。

目 次

第1章 調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
3 調査の経過	3
4 調査の方針と方法	3
第2章 調査遺跡の立地と歴史的環境	5
第3章 発掘調査の成果	7
1 北地区の遺構と遺物	7
2 南地区の遺構と遺物	12
第4章 遺構について	37
第5章 自然科学的調査の成果	43
笠松遺跡火葬墓出土人骨	43
第6章 まとめ	54
SUMMARY	

挿図目次

第1図 宇佐道路路線内遺跡位置図	4
第2図 宇佐道路周辺遺跡分布図	6
第3図 笠松遺跡調査区全体図	8
第4図 北地区出土遺物実測図	10
第5図 北地区溝平面図・土層断面図	11
第6図 南Ⅰ区遺構分布図	14
第7図 南Ⅰ区掘立柱建物実測図(1)	15
第8図 南Ⅰ区掘立柱建物実測図(2)	16
第9図 南Ⅰ区掘立柱建物実測図(3)	17
第10図 南Ⅰ区土坑実測図	18
第11図 南Ⅰ区火葬墓・出土遺物実測図	19
第12図 南Ⅰ区出土遺物実測図	22
第13図 南Ⅱ区遺構分布図	25
第14図 南Ⅱ区火葬墓実測図(1)	26
第15図 南Ⅱ区火葬墓実測図(2)	27
第16図 南Ⅱ区火葬墓実測図(3)	28
第17図 南Ⅱ区土坑1実測図	28
第18図 南Ⅱ区出土遺物実測図	31
第19図 南Ⅲ区遺構分布図・土層断面図	34
第20図 南Ⅲ区火葬墓実測図(1)	35
第21図 南Ⅲ区火葬墓実測図(2)	36
第22図 南Ⅲ区出土遺物実測図	36
第23図 火葬墓長・短径比図	37
第24図 火葬墓分布図	38

第25図	火葬墓主軸方位分布図	39
第26図	南Ⅰ区掘立柱建物配置図	41
第27図	南Ⅲ区溝底面傾斜図	42
第28図	南Ⅱ区2号墓人骨出土位置図	49
第29図	南Ⅱ区5号墓人骨出土位置図	50
第30図	南Ⅱ区9号墓人骨出土位置図	51
第31図	南Ⅲ区3号墓人骨出土位置図	52
第32図	南Ⅲ区4号墓人骨出土位置図	53

図版目次

巻頭図版 笠松遺跡 南Ⅱ区

図版1	北地区(1)	北地区(現道部)溝、北地区溝9土層断面
図版2	北地区(2)	北地区東半部、北地区西半部
図版3	南Ⅰ区(1)	南Ⅰ区空撮、南Ⅰ区東半部建物群
図版4	南Ⅰ区(2)	南Ⅰ区西半部建物群、南Ⅰ区南辺ピット群
図版5	南Ⅰ区(3)	南Ⅰ建物5柱穴11、南Ⅰ区建物6柱穴2
図版6	南Ⅰ区(4)	南Ⅰ区土坑3、南Ⅰ区土坑4
図版7	南Ⅰ区(5)	南Ⅰ区火葬墓、南Ⅰ区溝3
図版8	南Ⅰ区(6)	南Ⅰ区溝4、南Ⅰ区溝5
図版9	南Ⅱ区(1)	南Ⅱ・Ⅲ区空撮、南Ⅱ区火葬墓群空撮
図版10	南Ⅱ区(2)	南Ⅱ区2号墓、南Ⅱ区4・5号墓
図版11	南Ⅱ区(3)	南Ⅱ区5号墓、南Ⅱ区4号墓
図版12	南Ⅱ区(4)	南Ⅱ区4号墓、南Ⅱ区6号墓
図版13	南Ⅱ区(5)	南Ⅱ区7号墓、南Ⅱ区8号墓
図版14	南Ⅱ区(6)	南Ⅱ区8号墓、南Ⅱ区9号墓
図版15	南Ⅱ区(7)	南Ⅱ区9号墓、南Ⅱ区溝3
図版16	南Ⅲ区(1)	南Ⅲ区1号墓、南Ⅲ区2号墓
図版17	南Ⅲ区(2)	南Ⅲ区3号墓
図版18	南Ⅲ区(3)	南Ⅲ区4号墓
図版19	南Ⅲ区(4)	南Ⅲ区5号墓、南Ⅲ区溝6土層断面
図版20	南Ⅲ区(5)	南Ⅲ区溝7土層断面、南Ⅲ区南辺部溝10・11
図版21	出土土器(1)	
図版22	出土土器(2)	
図版23	出土土器(3)	
図版24	火葬人骨(1)	
図版25	火葬人骨(2)	
図版26	火葬人骨(3)	
図版27	火葬人骨(4)	

表目次

第1表	笠松遺跡火葬墓一覧表
第2表	南Ⅰ区掘立柱建物一覧表

第1章 調査の概要

1 調査に至る経過

宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財の調査は、北九州市から大分市に至る北大バイパス道路のうち宇佐市笠松から宇佐市山下までの間を対象としたものである。宇佐道路は中津バイパスから続く高規格道路で、さらに宇佐別府道路と接続し九州横断自動車道と合流する。宇佐道路建設に伴う調査は、昭和62年度から開始し、平成4年度に下林遺跡の一部まで終了した。

本報告の笠松遺跡の調査は、昭和62～63年度、平成2、4年度の4ヵ年間にわたり実施したものである。

遺跡の分布状況については、市域に濃密な広がりを見ることが従来より良く知られている。地形的には駅館川流域の河岸段丘、市南部の丘陵、平野部の微高地など特定の立地条件を限定しない。このような地形に展開された生活の営みは、集落、窯業、墓地、水利関連施設など具体的な内容を伴って多く発見されている。このように宇佐市は県内有数の遺跡集中地域であることは周知されていた。「宇佐道路」の建設予定地内における事前の遺跡分布調査では路線全長5km間に11遺跡(のちに10遺跡に統合)が確認され、当初よりその十全な対応が望まれていた。

2 調査の組織

昭和62年度

調査主体 大分県教育委員会

調査委員 賀川 光夫 (大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授)

小田富士雄 (大分県文化財保護審議会委員・北九州市立考古博物館館長)

石野 博信 (奈良県立橿原考古学研究所副所長)

時枝 克安 (島根大学助教授)

三辻 利一 (奈良県教育大学教授)

後藤 昭六 (大分県教育庁管理部文化課長)

後藤 宗俊 (同主幹)

調査主任 渋谷 忠章 (文化課埋蔵文化財第2係長)

調査員 西 哲弘 (文化課埋蔵文化財第2係主任)、小林 昭彦 (同主事)、友岡 信彦 (同嘱託)、後藤 晃一 (同嘱託)、永松みゆき (同嘱託)、吉武 牧子 (同嘱託)、小倉 正五 (宇佐市教育委員会社会教育課文化財係技師)、乙畑 政己 (同主事)、林 一也 (同技師)、佐藤良二郎 (同技師)

昭和63年度

調査主体 大分県教育委員会

調査委員 賀川 光夫 (大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授)

小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）

三辻 利一（奈良教育大学教授）

橘 昌信（別府大学教授）

小代 基雍（大分県教育庁管理部文化課長）

後藤 宗俊（同課長補佐）

調査主任 渋谷 忠章（文化課埋蔵文化財第2係長）

調査員 高橋 徹（埋蔵文化財第2係主査）、村上 久和（同主任）、西 哲弘（同主任）、小林 昭彦（同主任）、友岡 信彦（同主事）、吉田 寛（同主事）、後藤 晃一（同主事）、山田 拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）、永松みゆき（同嘱託）、吉武 敦子（同嘱託）、小倉 正五（宇佐市教育委員会社会教育課文化財係技師）、乙呷 政己（同主事）、林 一也（同技師）、佐藤良二郎（同技師）

平成2年度

調査委員 賀川 光夫（県文化財保護審議会委員・別府大学教授）

小田富士雄（大分県文化財保護審議会委員・福岡大学教授）

後藤 宗俊（別府大学教授）

橘 昌信（別府大学教授）

和田 晴吾（立命館大学教授）

田中 良之（九州大学助教授）

後藤 正二（大分県教育庁管理部参事兼文化課長）

林 英輝（同文化課長補佐）

調査主任 清水 宗昭（文化課埋蔵文化財第1係長）

調査員 坂本 嘉弘（同主査）、宮内 克己（同主査）、西 哲弘（同主任）、小林 昭彦（同主任）、原田 昭一（同主事）、吉田 寛（同主事）、後藤 晃一（同主事）、富田 修司（同嘱託）、高松 永治（同嘱託）、新宅 信久（同嘱託）、丸山 啓子（同嘱託）

平成4年度

調査委員 賀川 光夫（県文化財保護審議会委員・別府大学教授）

秋葉 正嗣（大分県教育庁管理部参事兼文化課長）

衛藤 伸一（同文化課長補佐）

調査主任 清水 宗昭（文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長）

調査員 坂本 嘉弘（同主査）、小林 昭彦（同主査）、原田 昭一（同主事）、高島 豊（同嘱託）

上記関係者の他に、次の方々には現地指導および有益なご助言をいただいた。記して謝意を表す次第である。

池上悟（立正大学）、佐藤興治（元大分市立歴史資料館長）、甲斐忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長）、真野和夫（同調査課長）

（敬称略）

3 調査の経過

発掘調査は既述の調査組織の編成下で行った。以下、年次ごとに該当遺跡の調査経過を示す。

昭和62年度調査

笠松遺跡北地区の試掘・本調査を実施した。調査の結果、北西方面に伸びる14条の溝、杭列、土坑などが検出された。出土遺物として、弥生後期の高坏などがある。

昭和63年度調査

本年は笠松遺跡の南端にあたる南Ⅰ区と南Ⅱ区の一部を調査した。遺跡は河岸段丘上に立地しており、濃密な遺構の分布が認められた。調査の結果、掘立柱建物9棟、溝5条、土坑7基、火葬墓1基などが検出された。出土遺物には須恵器、土師質土器、瓦質土器などがある。遺構の時期は掘立柱建物の大半が8世紀中葉（奈良時代）、掘立柱建物の一部、火葬墓および土坑は中世と考えられた。

平成2年度調査

北地区と南Ⅰ区間のすべての範囲について調査を実施した。地区名は南Ⅱ（前年度一部調査）、Ⅲ区と呼称する。南Ⅱ区では火葬墓9基、溝2条、土坑、ピットなどを検出した。隣接するⅢ区では火葬墓5基、溝12条、土坑、ピットなどを検出した。溝は30m幅の中に12条が近接あるいは重複して掘られており、その方向は共通して南から北へ伸びるものである。

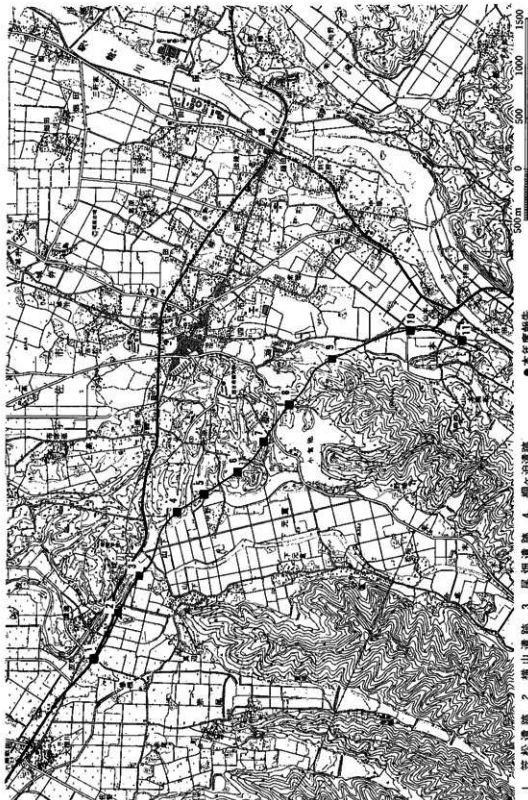
火葬墓は南Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区で合わせて15基確認され、この地区の中世における墓制を知る上で重要な発見であり注目された。

平成4年度調査

本年度は現道部分の調査を実施した。当該地区では道路建設が現道拡幅による交通整備の方策がとられており、当初拡幅部分について調査を実施した。しかしその後、隣接する現道部分についても掘削を伴う改修工事の計画を確認したため、拡幅部分の供用を待って調査を行ったものである。調査は約5m幅で400mにわたり実施した。調査の結果、既調査地区で検出されていた溝の延長部分、掘立柱建物の柱穴などが多く検出された。

4 調査の方針と方法

道路建設予定地内の調査については、調査は遺構の確認調査を実施し、その結果を踏まえて本調査を行うという手順で進めた。確認調査はトレンチ・グリッド法を併用して行う方法と対象地全域の表土を除去して行う2つのやり方を適宜用いた。



(本図は国土地理院「学座」(2万5千分の1)地形図を使用した)

第1図 宇佐道路路線内遺跡位置図

第2章 調査遺跡の立地と歴史的環境

宇佐市は大大分県北部に位置する。北は周防灘に面し、西は中津市、下毛郡三光村、本耶馬溪町に接し、東は豊後高田市、遠見郡山香町と境をなしている。旧国・郡名では豊前四の南端に位置する宇佐郡にあたる。

宇佐市の地形は北部の周防灘に面した平野部と南部の丘陵地帯に大きく分けることができ、平野部に突出した台地を含み三地帯に区分されている。平野部は東部地域が駅館川低地、中央部は伊呂波川低地および段丘、西部は中津平野東部と接する低地帯となっている。平野部を望む台地は中部台地と呼ばれ、東より横手、宇佐、四日市、天津の各台地に分かれる。さらに南部は急峻な傾斜をもつ丘陵地帯となっている。このように宇佐地域は多様な地形があり、遺跡の種類やその立地も変化に富む。

遺跡分布を主要な遺跡について時期ごとにみていくと、旧石器時代では四日市台地の北縁に位置する桐ヶ迫遺跡、正布迫遺跡があり発掘調査において当該期の石器が検出されている。特に峯添遺跡では堅穴状の遺構にともなって出土していることは注目される。この3遺跡は宇佐道路建設の事前調査が実施されたものである。石器が散布している地点としては、小倉池周辺など四日市台地上に主な分布域を確認できる。

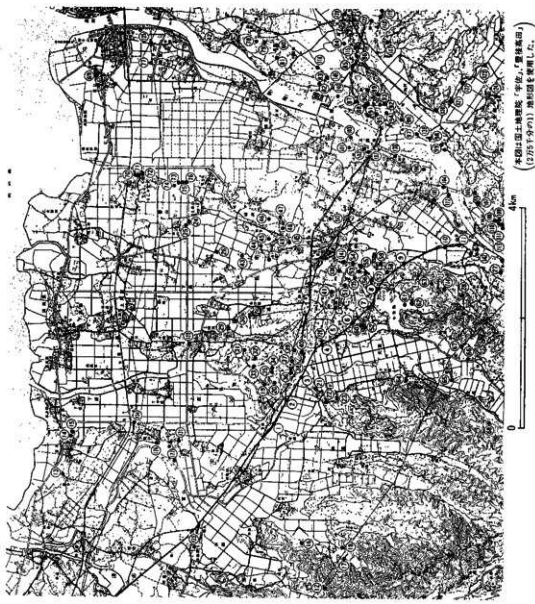
縄文時代の遺跡には、市西部の中津市との境界となっている五十石川の段丘上に西和田貝塚、伊呂波川左岸の河岸段丘上に後期～晩期の尾畑遺跡などが確認されている。市東部には立石貝塚など縄文後期の貝塚が多く分布している。

弥生時代の遺跡は、市西部に終末期の集団墓が知られている京徳遺跡、四日市台地に前期末～中期前半の台ノ原遺跡、駅館川右岸の微高地には東上田遺跡、女鹿遺跡、一盃田遺跡、樋尻道遺跡、野口遺跡、川部遺跡などが集中し、時期的には前期末から後期後半の連続的な遺構の存在が知られており、後述する古墳群集範囲と重複しており立地的な背景として重要な地域である。

古墳時代の遺跡については数・内容共に県内有数の地域として周知されている。先に述べた川部・高森地区には県内最古に属する赤塚古墳から葛原古墳、鶴見古墳と3世紀後半から6世紀代に及ぶ連続する前方後円墳が形成されている。

歴史時代の遺跡については白鳳時代の寺院跡として虚空蔵寺跡、法鏡寺廃寺、奈良時代では弥勒寺跡などがある。

笠松遺跡は宇佐市西北部に位置し、伊呂波川の河岸段丘上に立地する。



本図は国土地理院「宇佐」遺跡調査報告書(昭和5年)の遺跡分布図を基にした。

第2図 宇佐道路周辺遺跡分布図

1. 宮城遺跡
2. 横山遺跡
3. 尾道遺跡
4. 磯ヶ岡遺跡
5. 東山遺跡
6. 芝草遺跡
7. 船塚遺跡
8. 磯ヶ岡遺跡
9. 河内遺跡
10. 下山遺跡
11. 宇野河遺跡
12. 上山田原遺跡
13. 尾道行徳
14. 尾道遺跡
15. 尾道宮石野野
16. 今七古遺跡
17. 尾山橋遺跡
18. 尾山橋遺跡
19. 三ツ岩遺跡
20. 石道遺跡
21. 少林遺跡
22. 少林遺跡
23. 尾山遺跡
24. 尾山遺跡
25. 尾道宮石野野
26. 尾道宮石野野
27. 尾道宮石野野
28. 尾道宮石野野
29. 尾道宮石野野
30. 尾道宮石野野
31. 尾道宮石野野
32. 尾道宮石野野
33. 尾道宮石野野
34. 尾道宮石野野
35. 尾道宮石野野
36. 尾道宮石野野
37. 尾道宮石野野
38. 尾道宮石野野
39. 尾道宮石野野
40. 尾道宮石野野
41. 尾道宮石野野
42. 尾道宮石野野
43. 尾道宮石野野
44. 尾道宮石野野
45. 尾道宮石野野
46. 尾道宮石野野
47. 尾道宮石野野
48. 尾道宮石野野
49. 尾道宮石野野
50. 尾道宮石野野
51. 尾道宮石野野
52. 尾道宮石野野
53. 尾道宮石野野
54. 尾道宮石野野
55. 尾道宮石野野
56. 尾道宮石野野
57. 尾道宮石野野
58. 尾道宮石野野
59. 尾道宮石野野
60. 尾道宮石野野
61. 尾道宮石野野
62. 尾道宮石野野
63. 尾道宮石野野
64. 尾道宮石野野
65. 尾道宮石野野
66. 尾道宮石野野
67. 尾道宮石野野
68. 尾道宮石野野
69. 尾道宮石野野
70. 尾道宮石野野
71. 尾道宮石野野
72. 尾道宮石野野
73. 尾道宮石野野
74. 尾道宮石野野
75. 尾道宮石野野
76. 尾道宮石野野
77. 尾道宮石野野
78. 尾道宮石野野
79. 尾道宮石野野
80. 尾道宮石野野
81. 尾道宮石野野
82. 尾道宮石野野
83. 尾道宮石野野
84. 尾道宮石野野
85. 尾道宮石野野
86. 尾道宮石野野
87. 尾道宮石野野
88. 尾道宮石野野
89. 尾道宮石野野
90. 尾道宮石野野
91. 尾道宮石野野
92. 尾道宮石野野
93. 尾道宮石野野
94. 尾道宮石野野
95. 尾道宮石野野
96. 尾道宮石野野
97. 尾道宮石野野
98. 尾道宮石野野
99. 尾道宮石野野
100. 尾道宮石野野
101. 尾道宮石野野
102. 尾道宮石野野
103. 尾道宮石野野
104. 尾道宮石野野
105. 尾道宮石野野
106. 尾道宮石野野
107. 尾道宮石野野
108. 尾道宮石野野
109. 尾道宮石野野
110. 尾道宮石野野
111. 尾道宮石野野
112. 尾道宮石野野
113. 尾道宮石野野
114. 尾道宮石野野
115. 尾道宮石野野
116. 尾道宮石野野
117. 尾道宮石野野
118. 尾道宮石野野
119. 尾道宮石野野
120. 尾道宮石野野
121. 尾道宮石野野
122. 尾道宮石野野
123. 尾道宮石野野
124. 尾道宮石野野
125. 尾道宮石野野
126. 尾道宮石野野
127. 尾道宮石野野
128. 尾道宮石野野
129. 尾道宮石野野
130. 尾道宮石野野
131. 尾道宮石野野
132. 尾道宮石野野
133. 尾道宮石野野
134. 尾道宮石野野
135. 尾道宮石野野
136. 尾道宮石野野
137. 尾道宮石野野
138. 尾道宮石野野
139. 尾道宮石野野
140. 尾道宮石野野
141. 尾道宮石野野
142. 尾道宮石野野
143. 尾道宮石野野
144. 尾道宮石野野
145. 尾道宮石野野
146. 尾道宮石野野

第3章 発掘調査の成果

笠松遺跡は対象範囲の長さが520mと長大であり、しかも調査期間も四か年にわたったため、調査地区が細かく分かれてしまった。このため遺跡の地区名を便宜上北地区、南Ⅰ区、南Ⅱ区、南Ⅲ区の4地区に分けた。以下、この地区名を用いて説明を行う。なお、調査は拡張と現道部に分けて行ったが、本報告では上記地区に包括した表記方法をとりたい。

1 北地区の遺構と遺物

北地区は笠松遺跡の最も北部に位置する2,500㎡の範囲である。

確認した遺構は溝、土坑である。拡張部分に該当する北側の調査区では、溝14条を検出した。これらの溝は南東から北西へ流れるものである。調査区内で確認できる長さは10m～20m、長いものは約80mある。深さは0.1m～0.6mと差があるものの、0.5m前後の例が多い。

土坑は調査区の北端付近に1基確認された。長方形の平面形を呈し、1.5m×2.7m、深さ0.5mの規模である。土坑は内部に漆喰が塗られており、保水加工を施した水田の付属施設と考えられる。

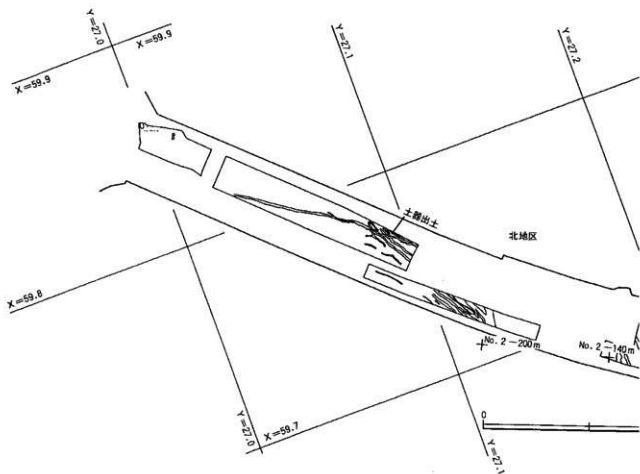
杭列は土坑の近くに位置し、北西方向に直径0.2m前後、深さ0.1m程度のピット6個が等間隔で配されたものである。土坑、杭列共に時期は不明である。

遺物は溝の覆土中から弥生後期の土器が数点出土している。

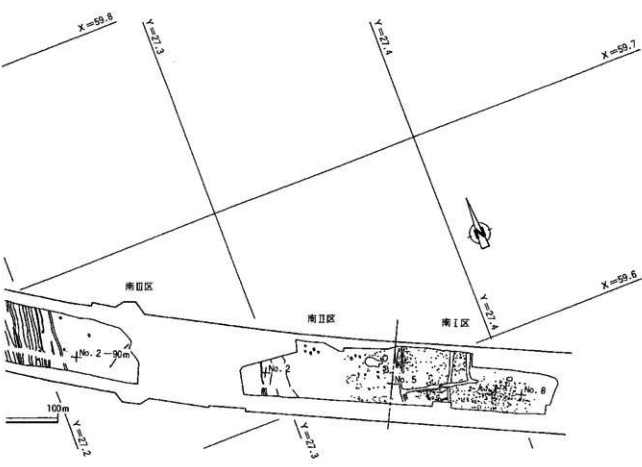
北地区の内、南に位置する範囲が現道部分である。ここの調査では溝10条を検出した。

溝は底面の傾斜からみて緩く南東から北西へ流れるものと思われる。基本層序は道路建設時のアスファルトを除く盛土が80cm、水田耕作土・床土30cm、この下層の粘質黄褐色土層が遺構確認面である。従って以下に示す溝の深さは遺構確認面から計測したものである。

溝1は北端が削平され、中央部も埋設物のため確認できないが約32mほどの長さをもつ。幅0.4m、深さ0.1mほどの浅く細い溝である。溝2は残りがわるく、約3mほどしか残っていない。溝3は北端部を埋設物によって切られているが、14mの長さが確認されている。幅0.5m～1.2m、深さ0.5m～0.7mである。溝4は溝3と同様に北端部が埋設物によって切られている。規模は確認長21m、幅0.6m～1.0m、深さ約0.6mである。溝5は溝6を切って構築されている。確認長16m、幅0.2m～0.4m、深さ0.14m～0.2mの規模をもつ。溝6は北東部において溝5に切られて、南西端は溝10と合流する。確認長16m、幅0.3m～0.4m、深さ0.13m～0.2mである。溝7は溝8を切って構築され、南西端は溝9に切られている。確認長16m、幅1.5m前後、深さ0.5m～0.7mである。溝8は北東部を溝7に、南西端を溝9によって切られている。確認長16m、幅1.5m前後、深さ0.5m～0.7mである。溝9はほぼ南北方向に伸びるが確認長8mと短く、この範囲で観察する限り底面傾斜はほぼ水平といえる。溝9は同一の場所で4条の溝の切り合い関係がある。最古段階の溝9-1は幅4m以上、深さ0.8m～1.0mの規模をもって



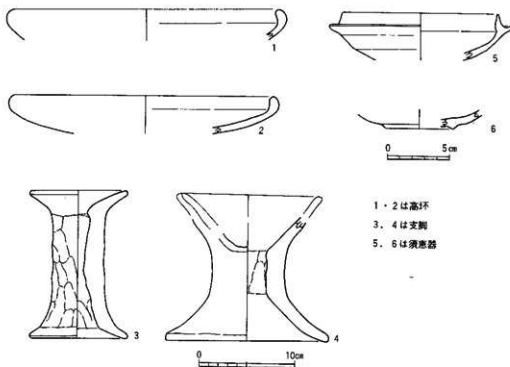
第3图 笠松遺跡調査区全体図



いたと考えられる。溝9-2~4は幅1.1m~1.8m、深さ0.6m~0.8mと溝9-1に比べると規模は小さい。これら3基の溝は溝9-1が埋まった後に構築される。このうち溝9-3は溝9-2に切られている。溝10は確認長13m、幅0.6m~0.8m、深さ0.3m~0.4mである。北東部を溝4に、南西端を溝9によって切られている。

出土遺物（第4図）

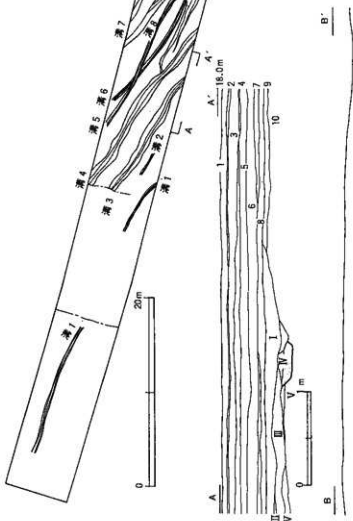
北地区の溝から出土した土器である。1~6は北地区北西に位置する溝の堆積土から出土したものである。7は現道部の溝から出土した。1・2は高坏の坏部破片である。口縁部は短く肥厚し内湾する。大きさは口径28cm程度に復元できた。胎土に角閃石を多く含み、焼成は脆弱で黄褐色を呈す。3・4は支脚である。3は1/2個体を残す。中空で脚部と上部は同じ形態をなす。外面に指頭による整形痕が顕著である。4は上部を欠くが、鼓形をなし上部を円形にえぐり取った形を示すものと思われる。3・4共に器高15.5cm程度である。器厚は厚く胎土に角閃石を多く含む。焼成は通有で淡黄褐色を呈す。5、6は須恵器坏身である。5は底部に回転ヘラ削りを施す。6は低い高台をもつ。出土土器の時期は1・2が弥生後期、3・4は弥生終末、5は6世紀後半、6は8世紀代と考えられる。ただ、出土状況からみて必ずしも溝の時期を示すものではないと思われる。



第4図 北地区出土遺物実測図

北地区
土層説明

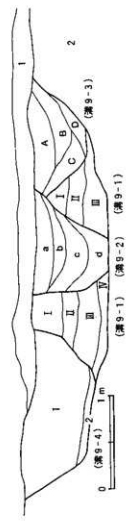
- 0 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 1 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 2 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 3 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 4 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 5 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 6 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 7 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 8 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 9 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
- 10 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)



基準標高値: 18.0m

No. 2-200m

- 北地区
土層説明
- 0 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 1 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 2 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 3 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 4 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 5 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 6 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 7 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 8 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 9 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)
 - 10 赤褐色土層 (遷移砂状砂質土)



第5図 北地区溝平面図・土層断面図

2 南地区の遺構と遺物

南Ⅰ区

南Ⅰ区はこの遺跡の最も南に位置する。北側は一段落ち、東側は遺構の種類では掘立柱建物が多く検出された。このほかに土坑、溝、ピット、火葬墓がみられる。このうちピットについては建物の柱穴となるものも含まれる可能性もあるが、有意な配列を見出せなかったためピットとした。遺物は余り多くないが遺構に伴う調査区中央部の建物2付近に堆積していたものなど若干出土している。

遺構

掘立柱建物は9棟が調査区全域に分布していた。主軸方位の異なる3つの群が存在する。第1群は建物1、2、4、5、7の5棟、第2群は建物3、6、8の3棟、第3群は建物9の1棟のみである。

建物1は2間×3間で4.2m×5.5mの規模をもつ。柱掘形は径0.22m～0.65m、深さ0.1m～0.3mである。北東隅の柱穴には柱位置の痕跡がみられる。主軸方位は北32度東を指向する。

建物2は2間×2間で2.6m×3.5mの規模をもつ。柱掘形は径0.2m～0.3m、深さ0.1m～0.2mである。主軸方位は北31度東を指向する。

建物3は2間×3間で4.0m×5.5mの規模をもつ。柱掘形は径0.4m～0.65m、深さ0.2m～0.45mである。主軸方位は北45度東を指向する。

建物4は2間×3間で3.8m×4.4mの規模をもつ。柱掘形は径0.5m～0.6m、深さ0.15m～0.4mである。主軸方位は北35度東を指向する。東隅の柱穴には柱位置の痕跡がみられる。

建物5は2間×4間で4.8m×6.7mの規模をもつ。柱掘形は径0.45m～0.65m、深さ0.25m～0.55mである。主軸方位は北33度東を指向する。西辺の柱穴列の3つと南隅の柱穴に柱位置の痕跡を確認した。東辺柱列の北より2間目の柱穴内から須恵器皿1点が出土した。

建物6は2間×4間で3.8m×6.8mの規模をもつ。柱掘形は径0.3m～0.6m、深さ0.3m～0.6mである。主軸方位は北50度東を指向する。北隅、南1間目と西1間目の柱穴内に角礫を用いた根石が確認された。

建物7は2間×4間で4.8m×7.2mの規模をもつ。柱掘形は径0.25m～0.65m、深さ0.1m～0.4mであるが0.35m前後が主体である。主軸方位は北31度東を指向する。東隅の柱穴には柱位置の痕跡がみられる。

建物8は2間×2間で4.1m×5.3mの規模をもつ。柱掘形は径0.3m～0.4m、深さ0.2m前後である。主軸方位は北31度東を指向する。

建物9は2間×3間で4.0m×5.8mの規模をもつ。柱掘形は径0.2m～0.3m、深さ0.2m前後と他の建物に比較して小さいものである。主軸方位は北23度東を指向する。東辺柱列の北より1、2間目の柱穴内から土器が出土した。この内1間目の柱穴出土の瓦質土器を図示した。

土坑は5基検出された。このうち土坑1、2はほぼ接して位置し、溝2を切断して掘られている。土坑3、4は土坑1、2から6mほど南に位置する。5号はこれら土坑と30m東に離れている。1号土坑は長さ0.8m×幅0.6mの不整形形を呈する。深さ0.15m前後である。南東隅をビットで切られている。土坑2は径1.0m～1.1mの円形を呈する。底面は径0.4mで、遺構確認面から0.45mの深さである。覆土上に礫が堆積していた。土坑3は径1.2mの不整形形を呈する。深さは0.15m前後である。底面は平坦面をなしている。底面付近から瓦質土器や礫などが出土している。土坑4は径1.3m～1.46mの不整形形を呈する。底面は丸く窪む。遺構確認面からの深さ0.55mである。土坑内から礫が若干出土している。土坑5は長さ3.2m×幅1.9m、深さ0.5mの規模をもつ。土坑内から礫が若干出土している。

火葬墓は調査区中央部北寄の溝3と建物1に挟まれた位置にある。長さ0.9m、幅0.63mの隅丸長方形を呈する。壁は削平を受け0.13mと浅くなっている。主軸方位は北14度東を指向する。底面はほぼ平坦面をなし、壁は緩く傾斜する。墓坑内は壁、底面ともよく焼け赤変している。底面には焼土や炭化材が散在し、その上粘質灰褐色土層、マンガン粒混入の砂性灰褐色土層が堆積していた。後世の擾乱はないが人骨の遺存状態はよくなく、北壁際から中央付近にかけて骨片が認められた。遺物は、土師質土器坏1点、皿2点が墓坑の中央よりやや南寄りから出土した。

溝は5条を確認した。溝1はこの調査区の最も西側に南北方向に伸びる。溝の中間で一端切れるが確認長27m、幅0.6m～2m、溝両端の底面高低差0.13mで北方向に傾斜する。

溝2は調査区西部に位置する建物9と平行して南北方向に伸びる。確認長17m、幅0.4m～0.9m、溝両端の底面高低差0.07mで北方向に傾斜する。

溝3は溝1と南側で接続し東方向へ伸びる。確認長30mで東端は後世の削平で消失している。幅1m～2m、底面の高低差は一定しないが概ね西方向に傾斜するものと思われる。

溝4は建物1の西側に南北方向に伸び、建物群の1、2群を画する位置関係にある。中央付近でこれと直交する溝3に切断される。確認長25m、幅1.1m～1.9m、溝両端の底面高低差0.1mで南北方向に傾斜するものと思われる。

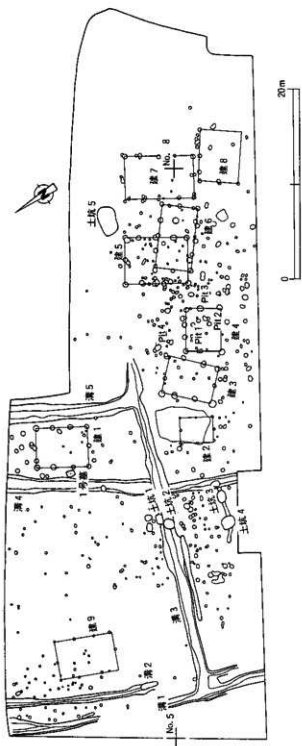
溝5は溝4の東5m～8mの位置に南北方向に伸びる。確認長14mで南端は溝3と合流する。幅1.5m～2.2m、溝両端の底面高低差0.14mで北方向に傾斜する。

出土遺物（第11図、第12図）

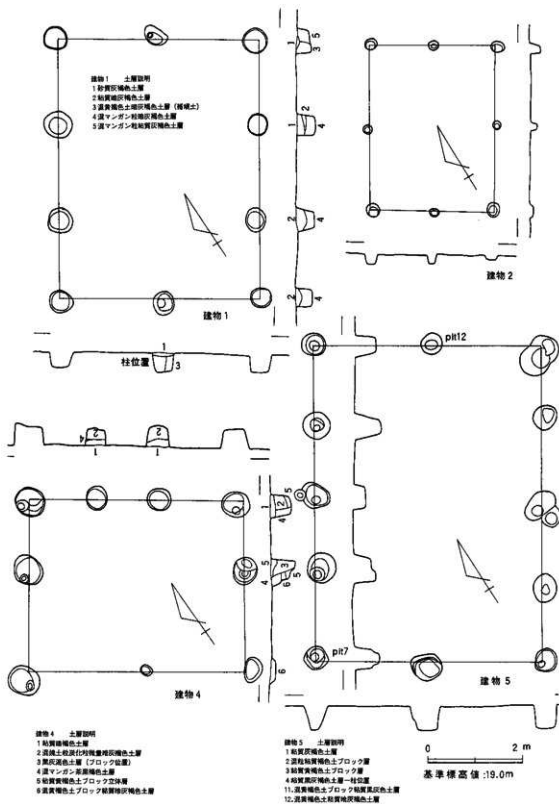
柱穴、土坑、ビットから出土した土器については11点を図示した（第12図）。

1・2は遺物包含範囲から出土した須恵器である。1は坏の1/5個体で、体部下端がやや張り出し気味に丸くなっている。体部は直線的に立ち上る。胎土、焼成は良好で灰褐色を呈する。大きさは復元口径12.4cm、器高3.9cmである。

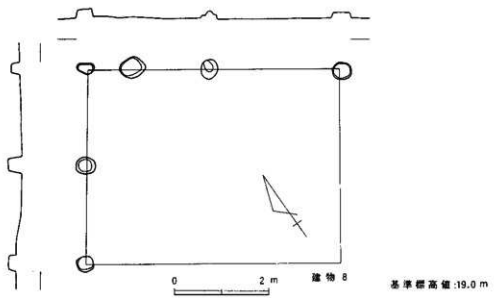
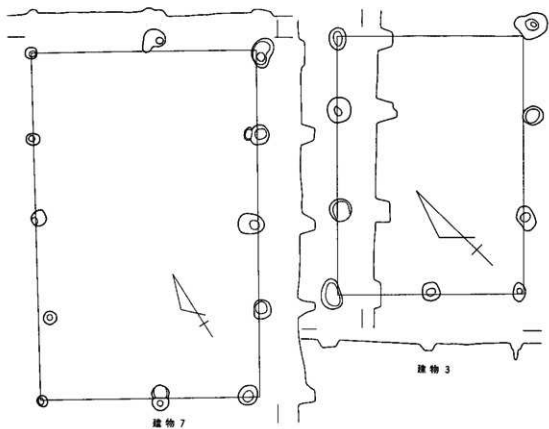
2は碗の1/4個体で、体部が大きく内湾する特徴をもつ。底部は回転ヘラ切り後、一方



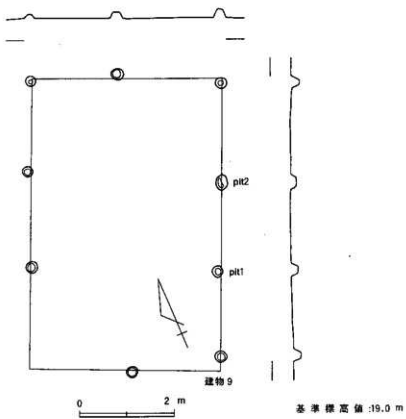
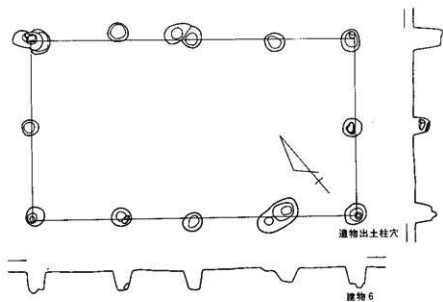
第6图 南I区遗物分布图



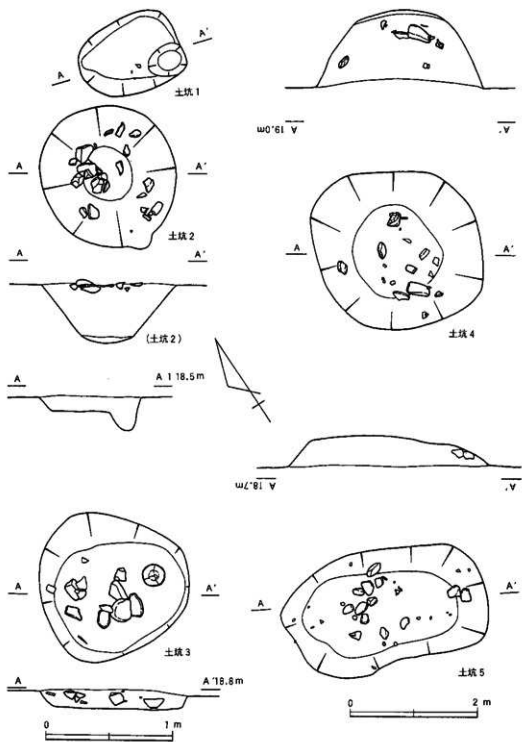
第7図 南Ⅰ区掘立柱建物実測図(1)



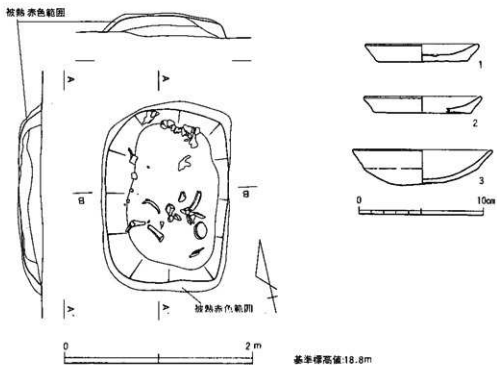
第 8 图 南 I 区 掘立柱 建筑物 实测图 (2)



第9図 南I区掘立柱建物実測図(3)



第10图 南I区土坑实测图



土層説明

- 1～混マンガン粒砂性灰褐色土層
- 2～粘質灰褐色土層
- 3～換土ブロック層

第11図 南Ⅰ区火葬墓・出土遺物実測図

のナデが施されている。胎土に角閃石を含み、焼成は通有で灰褐色を呈する。大きさは復元口径14cm、器高5cmである。

3はビット1から出土した須恵器高台付坏の底部破片である。高台は内側の縁で接地し外縁が浮いた形状となっている。胎土、焼成は良好で灰褐色を呈する。

4は建物5の柱穴から出土した須恵器皿1/6個体である。器形は弱い丸みをもつ底部から短く外傾する立上りをもつ。器厚は底部において一定であるが体部下端から口縁部に向かって極めて細く仕上げられている。底部は回転ヘラ切り後、ナデが施されている。胎土に角閃石、白色砂粒を含み、焼成は通有で灰褐色を呈する。大きさは復元口径13.4cm、器高1.8cmである。

5は遺物包含範囲から出土した土師器皿1/3個体である。器形は平坦な底部から大きく外傾して伸びる形態を示す。器厚は口縁部に向かって細く仕上げられている。底部には一方向のナデが施されている。胎土に角閃石、白色砂粒を含み、焼成は通有で赤褐色を呈する。大きさは復元口径12.8cm、器高1.8cmである。

6はビット2から出土した須恵器皿1/4個体である。この皿は平坦な底部をもち、体部下端から丸みをもって立上り口縁部で外へ屈曲する。器厚は底部において一定であるが、体部、口縁部は細くなっている。底部は回転ヘラ切り後、ナデが施されている。胎土に細砂を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。大きさは復元口径14.1cm、器高1.6cmである。

7はビット3から出土した土師器坏破片である。体部は内湾気味に立ち上る。胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良で暗赤褐色を呈する。

8はビット4から出土した土師器皿破片である。底部はやや凹凸をもつが概ね平坦である。体部は丸みを帯びて立上る。胎土に細砂を含み、焼成は通有で淡赤褐色を呈する。大きさは復元口径12.5cm、器高1.9cmである。9はビット2から出土した土師器甕の口縁部破片である。口縁部は「く」字状に屈曲する。胎土に角閃石を多く含み、焼成は通有で暗黄褐色を呈する。

10は土坑3から出土した瓦器碗の完形品である。体部は大きく開き、口縁部が断面矩形となっている。底部には断面三角形の低い高台が付く。器面は荒れており、ヘラミガキなどの調整は明確でない。ただ若干のナデは確認できる。胎土に角閃石、斜長石を含み、焼成は通有で灰褐色を呈す。大きさは口径15.4cm、高台径6.8cm、器高5.3cmである。

11は建物9の柱穴から出土した瓦器碗1/4個体である。体部は内湾気味に大きく開く。口縁部は断面矩形となっている。底部には断面三角形の高台が付く。体部は内外面はヘラミガキが施され、外面下部に指頭により整形痕が残る。底部外面に板状圧痕がみられる。胎土に角閃石が微量含まれる。焼成は通有で、色調は外面が黒褐色、内面淡赤褐色を呈する。大きさは口径16cm、高台径5.7cm、器高4.6cmである。

火葬墓から出土した土器は3点である（第11図）。

1～3は土師質土器である。1は口縁部の一部を欠くがほぼ完形の皿である。底部は平坦で、

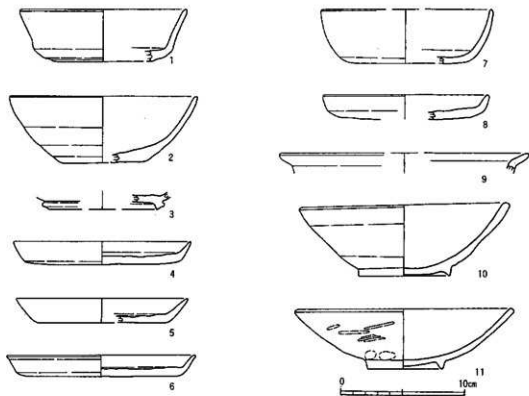
体部は外傾して立上る。底部の切り離しは右回転糸切りでなされている。大きさは口径8.3cm、底部径7cm、器高1.3cmである。

2は底部の大半を欠く皿である。1と同様に平たい底部と外傾して立上る体部をもつ。底部の切り離しは右回転糸切りである。口径8.6cm、底部径7.2cm、器高1.3cmである。

3は口縁部1/3を欠失する坏である。器形は底部から丸く湾曲して立上り、体部中ほどで屈曲がやや反り気味に変化し口縁部へ向かう形態を示す。体部下半から底部は外面に一方方向のナデが施されている。口径10.2cm、器高2.6cmである。

3点共に胎土に角閃石、斜長石を含み、焼成は通有で橙色を呈す。

これら南I区出土土器の年代は、1～9の須恵器が8世紀中葉、10、11の瓦器は13世紀前半、火葬墓出土の土師質土器が15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。



第12图 南I区出土遗物实测图

南Ⅱ区

南Ⅱ区はこの遺跡のほぼ中央1,600㎡の範囲である。遺構の種類では火葬墓が多く検出され、ほかに溝などがある。

火葬墓は調査区中央北部に1～6号、南部に7号、東部北辺寄りに8、9号が位置していた。

1号墓 隅丸長方形の平面形をもつ。規模は長さ1.17m、幅0.63m、確認面からの深さ0.14mである。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。底面と壁は被熱し赤変していた。墓坑内の人骨の遺存状態はあまり良くなく、中央付近に破片が若干散在していた程度である。壁下に焼土や炭化の堆積がみられた。

2号墓 は隅丸長方形の平面形をもつ。規模は長さ0.84m、幅0.53m、確認面からの深さ0.09mである。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。底面と壁は0.02m～0.07mの厚さで被熱し赤変していた。墓坑内には人骨が良好な状態で遺存していた。北壁下中央から南西隅にかけて頭骨、上腕骨、大腿骨などがほぼ旧状を窺える程度に残っていた。人骨の位置からみて被葬者は右側臥屈葬と考えられる。

3号墓 基本的には隅丸長方形の平面形をもつが北壁西半に長さ0.1mほどの円形掘り込みを伴う。墓坑は長さ1.12m、幅0.72m、確認面からの深さ0.1mである。底面は平坦で、壁は東壁が緩く外傾して立上り西壁は直立する。底面と壁は0.01m～0.05mの厚さで被熱し赤変していた。ただし底面中央部は周辺に比べて被熱の度合いが弱い。墓坑内の状態をみると、壁下に焼土や炭化の瓦礫が堆積し、人骨は底面の南半部に集中していた。人骨の位置から坐葬であったことが想定される。

4号墓 西半部を5号墓に切られ、西壁と南壁の大半を失っていたが底面はほぼ残っていた。平面形は隅丸長方形を呈す。規模は長さ1.04m、推定幅0.6m、確認面からの深さ0.27mである。壁は平坦な底面からやや外傾して立ち上がる。墓坑の被熱状況は壁が0.01m～0.04mの厚さで赤変し、底面では薄い被熱層が確認できた。墓坑内には直径10cm～30cmの河原石が置かれていた。それぞれの石は接しているが空隙をもち、燃焼効率を考慮した施設と思われる。これらの石の上に骨片が若干残っていた。また火葬後に副葬された土師質皿4点、坏1点が東壁下に検出されている。底面には炭灰層が3cmほどの厚さで堆積していた。

5号墓 4号墓が埋め戻された後に、これを東壁が切って構築されている。平面形は隅丸長方形を呈す。規模は長さ0.94m、幅0.51m、確認面からの深さ0.18mである。壁から底面にかけては舟底状になっている。被熱状況は壁で0.02m～0.05mの厚さの赤変範囲で確認されている。墓坑内には直径10cm～15cmの河原石が2個置かれていた。壁際には被熱した壁が崩落していた。人骨は頭位を北にとり、墓坑の主軸に沿って頭骨、肩甲骨、上腕骨、大腿骨などがほぼ原位置で残っていた。副葬品として南辺の大腿骨付近から土師質の皿が2点出土している。

6号墓 隅丸長方形の平面形をもつ。規模は長さ1m、幅0.51m、確認面からの深さ0.11m

である。底面は平坦であり、壁は北壁が直立し、ほかの壁はやや外傾して立ち上がる。壁、底面共に被熱しているがその範囲は一定していない。被熱範囲は厚いところで0.01m～0.05m程度で赤変している。底面は炭灰で覆われており、炭化材や焼土ブロックなどがみられる。人骨は墓坑の中央や南東に散見できるが量的には多くない。

7号墓 一辺0.85m～0.9mのほぼ正方形の平面形をもつ。確認面からの深さ0.31mである。底面はやや中央部に向かって低くなっているが、壁は4壁とも直立する。墓坑内には多数の河原石が底面にみられた。それらは明確な規格性をもたないが、長径0.2m～0.25mの礫6個が間隔を保って置かれ、その回りに長径0.15m以下の比較的小さなものが30個ほど配されている、という状態である。この礫を覆う状態で厚さ0.13mほどの炭灰層が堆積していた。炭灰層には炭化材が多く含まれ、北隅には竹材が数点みられた。人骨は細片数点が炭灰層上面で確認されたにすぎない。出土遺物としては土師質土器坏2点が南北西の壁下の炭灰層上面で検出されている。土器は被熱していないため、火化後に納められたものと考えられる。このように状況からみて、7号墓は一応、墓と呼称したが本来火葬墓とは異なる機能をもつことが推察される。

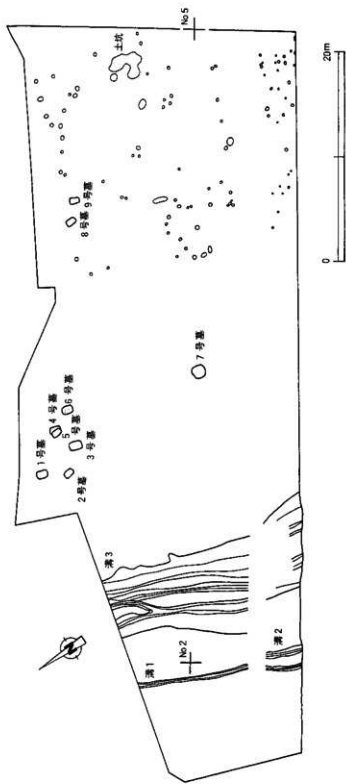
8号墓 隅丸長方形の平面形をもつ。規模は長さ0.9m、幅0.65m、確認面からの深さ0.16mである。底面は平坦であり、壁は直立気味に立ち上がる。壁、底面共に被熱しているがその範囲は一定していない。墓坑内には壁際に炭化材や焼土ブロックが散在していた。人骨は破片が底面北半部に若干みられる程度で遺存状態は良くない。出土遺物として、土師質の皿2点、坏1点が北西隅、東壁寄りから検出された。

9号墓 隅丸長方形の平面形をもつ。規模は長さ0.86m、幅0.55m、確認面からの深さ0.17mである。壁は緩い舟底状を呈し底面からやや外傾に立ち上がる。壁、底面共に被熱しており、墓坑南半部において顕著な赤変範囲を確認できる。墓坑内には壁際に焼土ブロック、南半部に炭化材を検出した。人骨は比較的良好な遺存状態を示していた。中央付近に集中し周辺部にやや散在的にみられ、このような状態から坐葬と考えられる。出土遺物として、土師質の坏1点が北西隅から検出されている。

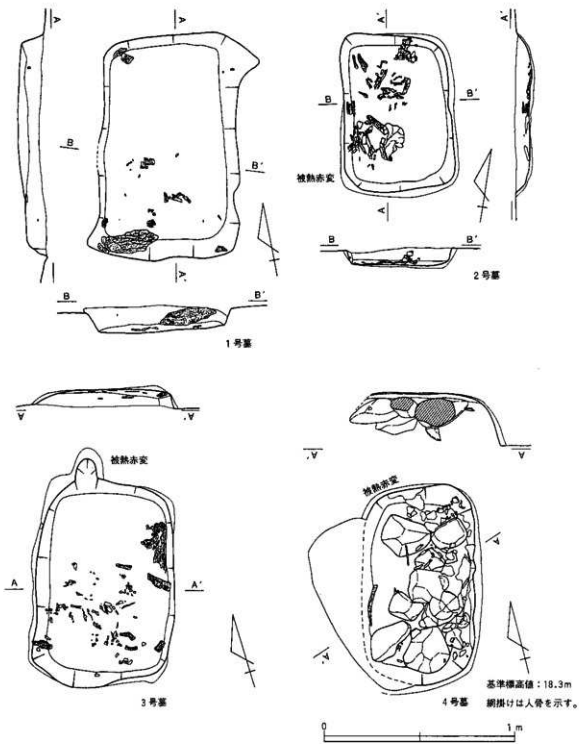
溝は調査区西辺に3条確認されている。

溝1 調査区の最も西に位置する。確認長15.5m、幅0.5mの規模をもつ。溝2は南辺で確認したものである。溝1、2は並行して伸びるが、共に浅く規模も小さいものといえる。

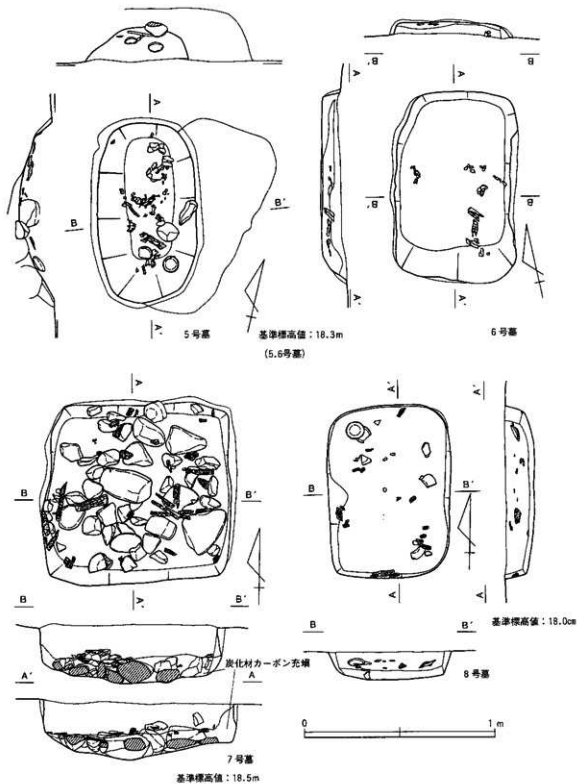
溝3 溝1、2の東側に位置する。確認長20m、幅6m～9mであるが、この幅の中に2、3条の溝が伴っている。溝両端の底面高低差をみると途中で高低差がつくものの全体としてはほぼ水平な例と0.3mの差をもって北方向に傾斜するものがある。溝3の覆土中から須恵器蓋坏の身と蓋各1点が出土している。



第13圖 南II区遺構分布圖



第14図 南Ⅱ区火葬墓実測図(1)



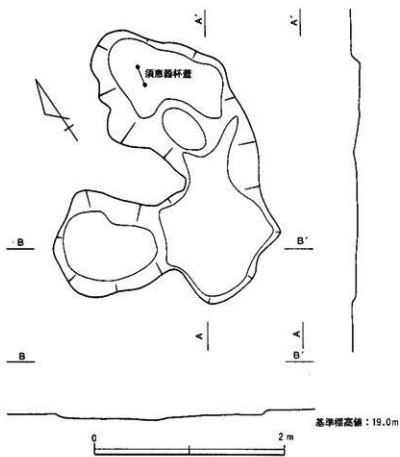
第15図 南Ⅱ区火葬墓実測図(2)

土坑1 調査区東端付近に検出した土坑で、円形土坑が3基連続した形状を呈する。南北方向に3.1m、東西方向に2.4mの長さをもつ。確認面からの深さは0.05mほどと浅い。出土遺物として須恵器や土師器甕の細片を検出しているが、北部の底面から須恵器坏蓋を図示した。

ピット 調査区東半部に約90個のピットを確認したが、掘立柱建物の柱穴となるような配列をもつものはない。



第16図 南Ⅱ区火葬墓実測図(3)



第17図 南Ⅱ区土坑1実測図

出土遺物（第18図）

図示した遺物は1～5が4号墓、6、7は5号墓、8、9は7号墓、10～12は8号墓、14は溝3、15は溝1、16は土坑1から出土した。

1～4、6、7、10、11は土師質の皿である。1は底部からやや外反して立ち上がる。底部は回転糸切りで切り離し、板状圧痕が残る。大きさは口径8cm、器高1.2cm、底径5.8cmである。2はやや丸みをもって立ち上がる。底部は右回転糸切りで切り離し、板状圧痕が残る。大きさは口径7.9cm、器高1.2cm、底径5.3cmである。3は部分によって立ち上がりの傾きが異なる。底部は右回転糸切りで切り離し、板状圧痕が残る。大きさは口径7.6cm、器高1.1～1.4cm、底径5.6cmである。4はほぼ直線的に立ち上がる。底部は右回転糸切りで切り離し、板状圧痕が残る。大きさは口径7.6cm、器高1.4cm、底径5.5cmである。6は体部の器厚が底部に比べ薄い。底部は回転糸切りで切り離されたものであるが、その後ろに粗いナデが施され切り離しの痕跡を消している。大きさは口径7.9cm、器高1.3cm、底径6cmである。7は部分によって立ち上がりの傾きが異なる。底部は右回転糸切りで切り離した後、ナデが施されている。大きさは口径8.5cm、器高1.1～1.3cm、底径6.1cmである。10は立ち上がりの傾きが一定でなく歪んでいる。底部は回転糸切りで切り離した後、ナデが施され板状圧痕も残る。大きさは口径7.9cm、器高1.1～1.6cm、底径5.1cmである。11は底部から外反して立ち上がるが、ほかの皿に比べ直立に近い傾きをもつ。底部は右回転糸切りで切り離し、その後ナデが施されている。大きさは口径8.4cm～9cm、器高1.5cm、底径7cmである。図示した皿は6が口縁部の大半を欠失している以外は完形である。焼成は通有で淡橙色を呈し、胎土に角閃石、斜長石を含む。調整は体部に横ナデ、内面の底部付近にはナデが施されている。器形は大半が大きく外傾し、底部は体部との境が明瞭なことも特徴といえる。

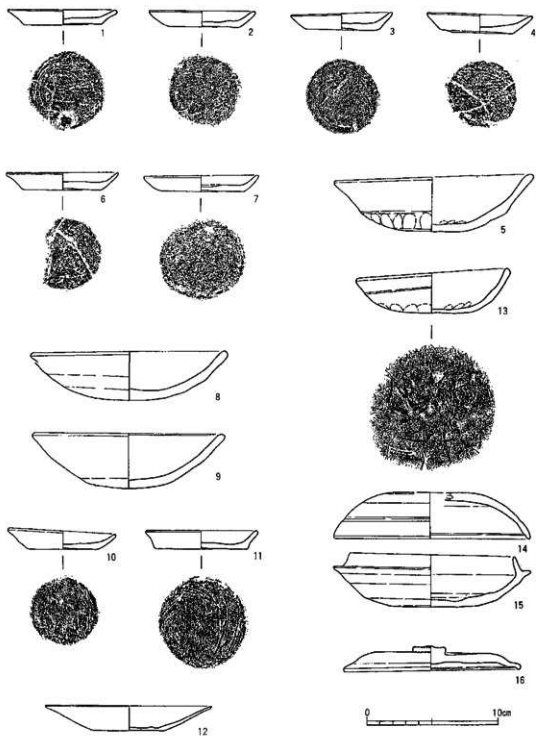
5、12、13は土師質土器で、5・13は境、12は坏である。5は完形品で、底部から丸く立ち上がり、体部の中位でやや外反し、丸く肥厚する口縁部に至る。調整は体部上半部に横ナデが施されている。体部下半部にはヘラ状工具による円方向の削りが施され、整形時の指頭痕が残っている。底部外面は回転ヘラ切り後、横ナデが施されている。底部内面は指頭圧痕が僅かに残るが、一方向の丁寧なナデで仕上げられている。大きさは口径14.5cm、器高4.5～5.4cmである。焼成は通有で橙色～淡黄褐色を呈し、胎土に角閃石を含む。12は器壁が極めて薄い。口縁部～底部周縁の1/4が残る。器形は底部が平底状をなし、体部は大きく外反して立ち上がる。大きさは復元口径12.6cm、器高1.9cmである。焼成は通有で淡黄褐色を呈し、胎土に白色砂粒を含む。13は小型の完形品である。底部から丸く立ち上がり、体部中程に稜をもつ。調整は体部上半部に横ナデ、体部下半部から底部にかけて整形時の指頭痕が残り、ヘラ削りが施されている。底部内面は指頭圧痕が僅かに残り、ナデで仕上げられている。大きさは口径11.1cm、器高2.6～3.5cmである。焼成は通有で淡灰色～淡黄褐色を呈し、胎土に角閃石を多く含む。

8、9は瓦質の境である。8は1/2個体が残存している。底部は丸く、緩く内湾して立ち上がる。体部下半部から底部にかけて多方向のナデがみられる。内面は円方向のナデが施されている。大きさは口径14.5cm、器高3.8cmである。焼成は通有で灰色を呈し、胎土に角閃石を含む。9は1/4個体が残る。底部は丸く、内湾気味に立ち上がる。体部下端から底部にかけてナデ調整が行われている。体部は横ナデで仕上げられている。内面には多方向のナデがみられる。大きさは口径14.2cm、器高4.1cmである。焼成は通有で暗灰色を呈し、胎土に角閃石を含む。

14~16は須恵器である。14は坏蓋1/4個体である。低平な形状を呈し、天井部は平坦になるものである。天井部と口縁部の境に浅い沈線が走り、口縁部内面に段の退化した細い沈線を確認できる。天井部は回転ヘラ削りが施され、体部~口縁部は横ナデの調整がみられる。口径14.7cm、器高3.5cmである。焼成は通有で灰褐色を呈し、胎土に若干砂粒を含む。15は蓋坏の身1/3個体である。底部は回転ヘラ削りで調整が施され平坦である。受部は短く水平に伸び、立ち上りは長い。体部は横ナデで仕上げられ、底部内面には多方向のナデ調整がみられる。16は鈕付の蓋1/3個体である。低平な形状を呈している。鈕は低いボタン状をなし、中央部がやや突出する。天井部は平坦であり、口縁部との境付近で緩くS字状に屈曲する。口縁部は端部が丸く屈曲は弱い。調整は鈕と天井部周縁付近から口縁部に横ナデ、天井頂部付近に回転ヘラ削りが施され、天井部内面は一方向のナデで仕上げられている。

出土した土器の年代は、火葬墓出土の土師質土器、瓦質土器はその特徴から15世紀後半~16世紀初頭に比定できよう。

須恵器については14・15が前段階の古い形態を残すものの、6世紀後半代(TK43型式)に当てることができる。ただし、出土した溝の年代を示すものではなく、流れ込んだものと思われる。16は器形の特徴から8世紀中葉の所産と考えられ、出土状況から土坑1の年代を決定し得るものであろう。



(1~5は4号墓、6・7は5号墓、8、9は7号墓、10~12は8号墓、13は9号墓、14は清3、15は清1、16は土坑1出土)

第18図 南Ⅱ区出土遺物実測図

南Ⅲ区

南Ⅲ区は北区と南Ⅱ区に挟まれた1,800㎡の範囲である。遺構の種類では火葬墓と溝が検出されている。

火葬墓は調査区東半部に5基が散在する。2、4号はやや南側に近接するが他の3基は12m～15mの距離を保っている。

1号墓 火葬墓の分布範囲では最も西に位置し、溝4の南端に営まれていた。隅丸長方形の平面形をもつ。規模は長さ0.82m、幅0.51m、確認面からの深さ0.11mである。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。底面と壁は被熱し赤変しており、とくに壁は0.03m～0.09mの厚さで赤変し顕著な被熱状況が窺えた。墓坑内の人骨の遺存状態は、北隅付近に頭骨、前腕骨など部位の想定される骨片の集中が確認された。この他の人骨は南隅にかけて小破片が散在していた。人骨の位置から仰臥屈葬か側屈葬が想定されている。また墓坑内には焼土や炭化材の堆積が若干みられた。

2号墓 火葬墓の分布範囲では最も南に位置し、溝3と接し構築されていた。遺存状態が悪く、底面のみ残存し、壁との境は被熱範囲で一部を確認するに留まった。従って、平面形態は不明であるが隅丸長方形と想定される。残存する部位の計測から長さ0.7m、幅0.45m以上の規模であると思われる。底面は平坦である。底面と壁の被熱は顕著であり、壁の最も赤変範囲の厚い部分では0.06mあった。墓坑内の人骨は南半部に小破片が散在する程度であり、遺存状態はよくなかった。出土遺物は土師質土器の破片1点がある。

3号墓 1号墓の東10mに位置する。基本的には隅丸長方形の平面形であるが、南辺は北辺に比べ短い。墓坑は長さ0.96m、幅0.56m、確認面からの深さ0.28mである。底面は中央に向かって深くなっている。壁は東・西壁が直立し、南壁は緩く立ち上がる。底面と壁は被熱し、特に壁は0.01m～0.04mの厚さで赤変範囲が形成されていた。人骨は良好な状態で遺存していた。人骨は原位置を移動したものを除くと墓坑の中央付近に集中する。部位の判明する骨は西壁下の南寄りから頭骨、大腿、腓骨などがあり、中央では肋骨、腰椎などが確認されている。

4号墓 2号墓の東5mに位置する。平面形は不整形を呈す。規模は長さ1.07m、幅0.82m、確認面からの深さ0.12mである。壁はほぼ平坦な底面からやや傾斜して立ち上がる。墓坑は底面・壁共に被熱が確認されている。墓坑内の人骨は部位の明確な状態で検出された。まず頭骨が北壁下中央に広がり、その南に下顎、さらに墓坑中央に上腕、大腿骨などが残っていた。このような状態から仰臥屈葬と考えられている。なお東壁下には焼土が堆積し、北東隅、西壁下の一部に炭化材が残存していた。

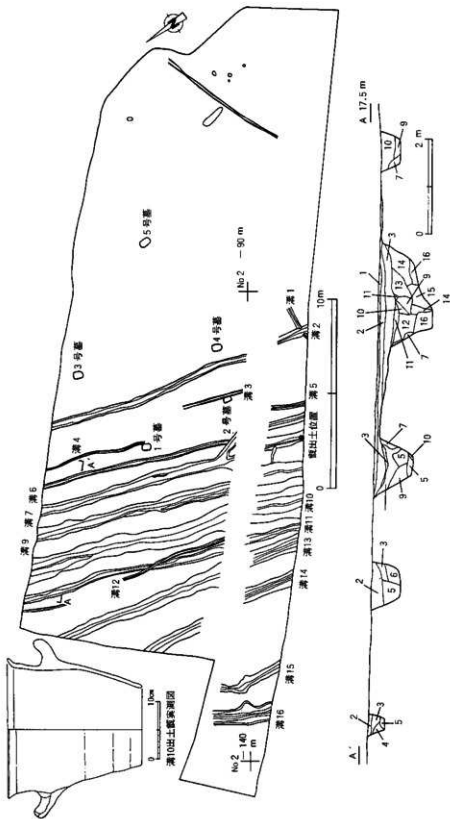
5号墓 火葬墓群中の最も東に位置する。平面形は不整形を呈す。墓坑は長さ1.14m、幅0.68m、確認面からの深さ0.08mと上部がかなり削平されている。底面は平坦であり、壁は緩く立ち上がる。被熱状況は底面南半に顕著であり、0.01mの被熱・赤変範囲を確認している。

墓坑内には基底面から0.02m～0.05mほど炭灰層が堆積し、この上に炭化材、焼土が散在していた。人骨は北壁下から底面南半部にかけて残っていた。このうち頭骨は北壁下に、その南に肩甲骨、南半部には大腿骨、下肢骨などが検出された。

溝

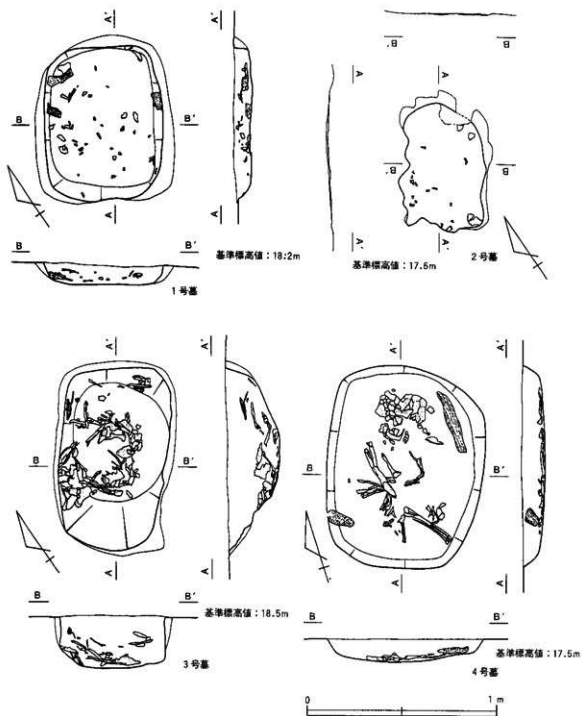
調査区の西半部36m幅の中に溝17条を確認した。これらの溝は溝1、8、17を除けば南北あるいは北東～南西に伸び各々の溝がほぼ並行するものである。溝17は溝1～16とは離れて調査区の東端に近い位置にある。溝1～16は東から西に順に呼称する。

溝1は溝の集中範囲では東部に位置する。確認長3.5m、幅0.35m～0.5m、溝両端の底面高低差0.015mで北東から南西方向に傾斜するものと思われる。溝2は南端で溝1と重複する。確認長29m、幅0.7m～0.9m、溝両端の底面高低差0.1mで南方向に傾斜する。溝3は両端が不明であるが、確認長6.8m、幅0.35m～0.5m、底面の高低差は0.04mで北方向に傾斜する。溝4は南端が消失している。確認長10.7m、幅0.2m前後、溝両端の底面高低差0.02mで北方向に傾斜するものと思われる。溝5は北端が消失している。確認長3.5m、幅0.7m～1.1m、溝両端の底面高低差0.13mで北方向に傾斜する。溝6南端は溝7に切られている。確認長20m、幅0.3m～0.5m、溝両端の底面高低差は部分的に深さの差がみられるが、両端の高低差は0.06mで緩やかに南方向へ傾斜するものと思われる。溝7は確認長29m、幅0.7m～1.2m、溝両端の底面高低差0.35mで北方向に傾斜する。南部で幅0.7mおよび1m前後の溝2条が合流する。溝8は溝7、溝9と接続する。東西方向に2m確認でき、幅0.2m～0.3mである。溝両端の底面高低差0.1mで西側の溝7の方へ傾斜する。溝9は確認長29m、幅0.8m～1.4m、溝の底面は北へ向かって傾斜するが、南端から15mまでの落差で0.04m、その地点で0.43mと急に下がり、北端までは0.15mの高低差で緩やかに傾斜する。溝10は確認長30m、幅0.5m～0.9m、溝両端の底面高低差0.04mで緩やかに北方向に傾斜する。溝12は南側が削平され不明確であり、中間部分も6mほど消失している。確認長23m、幅0.15mから0.4m、溝両端の底面高低差0.04mで緩やかに南方向に傾斜する。溝13は確認長26.5m、幅1m～1.7m、溝両端の底面高低差0.04mで緩やかに北方向に傾斜する。溝14は確認長17m、幅1.1m～1.3m、溝両端の底面高低差0.15mで緩やかに北方向に傾斜する。溝15は確認長7m、幅0.5m～1.4m、溝両端の底面高低差0.02mで緩やかに南方向に傾斜する。溝16は確認長6m、幅1.5m～2.5m、溝両端の底面高低差0.03mで緩やかに北方向に傾斜する。溝17は確認長14m、幅0.2m～0.3m、溝両端の底面高低差0.05mである。西から東方向に傾斜する。

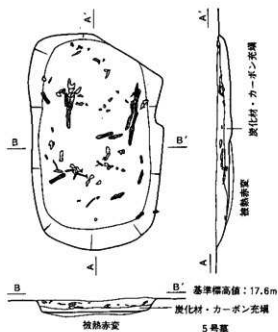


- 第3, 5~8層土層説明
- | | | | |
|---|---------------|----|-----------------|
| 1 | 瀧マンガン粘区褐色粘質土層 | 9 | 黄灰色粘質土層 |
| 2 | 瀧マンガン粘区褐色粘質土層 | 10 | 灰茶褐色粘質土層 |
| 3 | 黄褐色粘質土層 | 11 | 暗灰色粘質土層 |
| 4 | 灰褐色粘質土層 | 12 | 暗灰色粘質土層 |
| 5 | 黄褐色粘質土層 | 13 | 瀧マンガン粘区淡茶褐色粘質土層 |
| 6 | 黄褐色粘質土層 | 14 | 灰褐色粘質土層 |
| 7 | 黄褐色粘質土層 | 15 | 淡灰色粘質土層 |
| 8 | 瀧マンガン粘区褐色粘質土層 | 16 | 灰色粘質土層 |

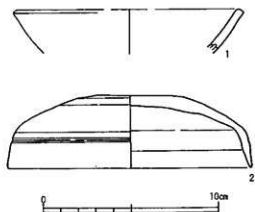
第19図 南山区遺構分布図・土層断面図



第20图 南Ⅲ区火葬墓实测图(1)



第21図 南Ⅲ区火葬墓実測図(2)



第22図 南Ⅲ区出土遺物実測図

出土遺物 (第22図)

南Ⅲ区から出土した遺物は、2号墓出土の土師質土器、溝の堆積土から検出された土師器、須恵器などであるが、ほとんどが細片であり実測不可能であった。土器の示す時期は古墳時代から近世におよぶが、出土状況からみて流れ込んだものと考えられる。

このうち2点を図示した。1は2号墓出土の土師質坏である。口縁部付近の破片であるため、大きさは不明である。残存部分の観察から、体部は丸く立ち上がるものと思われる。口縁部は端部が丸く仕上げられている。焼成は通有で橙色～淡灰褐色を呈し、胎土に角閃石、白色砂粒を含む。15世紀後半～16世紀初頭の所産である。

2は溝9、11の堆積土から出土した須恵器が接合したものである。器種は口縁部1/4を欠くが完形に近い坏壺である。天井部は回転ヘラ削りを施し平坦となっている。口縁部は直立気味に伸び、口縁端部は細く仕上げられている。体部－口縁部は横ナデ、天井部内面は多方向のナデで調整されている。大きさは口径13.7cm、器高4.1cmである。器形の特徴から6世紀中頃(T K10型式)に比定できる。

南Ⅲ区遺構分布図中に示した甔は1/4を欠くもので、牛角状の把手をもつ。大きさは器高、口径共に23.8cmである。胎土に角閃石を多く含む。6世紀後半に比定できる。

第4章 遺構について

1 火葬墓

ここでは笠松遺跡で検出された火葬墓について若干の整理を行い、今後の検討材料として供するものである(註1)。

規模と形状について

検出された火葬墓は南Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区を合わせ15基ある。墓坑の規模は長径0.7m~1.17m、平均96cm、短径0.45m~0.82m、平均0.57mである。短径：長径は0.62mを平均値とする。ここで提示した数値は本来の遺構面がかなり削平されていることを勘案しなければならないが、一応の傾向を表すものとして示した。ここに明確な規格性は認められぬが恐らく平均値に近い規模が埋葬者の意識にあったものと思われる。火葬墓で検出された人骨の内、年齢を想定できる例はすべて成人であることから、墓坑は必要最小限の規模で設けられたものといえる。

墓坑の形状は不整円形と不整楕円形を2基、正方形1基を含むがほぼ隅丸長方形が基本形と考えられる。このうちⅡ-7号墓は正方形を呈し、他の火葬墓とは異なる形状をもつ。人骨の出土状況から火葬が行われたものではないと判断される。出土遺物としては土師質土器がある。墓坑内には炭灰が充填しており壁、底部の被熱も明確である。炭灰層の上には黄褐色土があり、火化後に埋められたことを示している。位置的には他の火葬墓からやや離れており、供養などの施設と考えられるが性格は不明確である。

墓坑内の状況と施設

火葬墓15基すべては被熱し壁面、底面に赤変硬化層が確認されており、墓坑内には炭灰、焼土層、その上に黄褐色土が堆積していた。したがって、Ⅱ-7号墓を除く14基は火葬の順序と

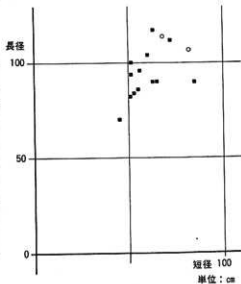
(凡例) 人骨の残存度

A: 比較的良形で姿勢を確認できる, B: 部位を確認できる, C: 断片がみられる, D: ほとんど無い

単位: cm

地区名	番号	規 模			方 位	出 土 人 骨		出 土 遺 物
		長径	短径	深さ		年・性	残存度	
南Ⅰ区	1	90	63	13	北14度東	---	B	○
	2	84	53	9	北9度西	---	A	
Ⅱ区	3	112	72	10	北20度東	---	A	
	4	(104)	(60)	27	北14度東	---	A	○
	5	94	51	18	北10度東	---	A	○
	6	100	51	11	北17度東	---	B	○
	7	90	85	31	ほぼ北	---	D	○
	8	90	65	16	ほぼ北	---	C	○
	9	86	55	17	北24度東	成年女	A	
	Ⅲ区	1	82	51	11	北35度東	---	B
2	(70)	(45)	---	---	---	C		
3	96	56	28	北39度東	成年	A		
4	107	82	12	北22度東	熟~老年男	A		
5	114	68	8	北4度西	男	B		

第1表 笠松遺跡火葬墓一覧表



第23図 火葬墓長・短径比図

して墓坑の掘削から火葬、土器の供献、埋め戻しの段階を経たものと観察できる。火葬墓の中で、Ⅱ-4、5、7号墓の3基については底面に礫を配した施設がみられた。また礫は被熱し赤変していた。この施設は底面にやや大きめの礫を間隔をおいて配したもので、燃焼効率を考慮した状態であった。配石施設は性格の異なる7号墓を除くと、

2基のみでありこの火葬墓群中で一般的ではないが、これらに他の火葬墓と異なる様相は土器を伴う以外に確認できない。

人骨および供献品

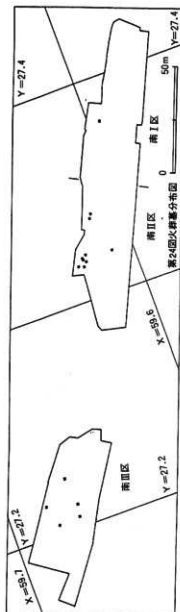
人骨の残存状況はほぼ半数について屈葬あるいは座葬という埋葬姿勢が確認されている。しかし、全体に人骨の残り方はあまり良くなく部位のみ判明した例が半数ある。二次的な移動、拾骨に伴う状況を想定できる。ただ田中氏が第5章で指摘しているように、本遺跡例では優先的に拾骨がされていない例もあり注意される。

火葬墓に人骨と他の遺物が出土した例は、Ⅰ-1号墓、Ⅱ-4・5・8号墓・Ⅲ-2号墓の5例に限られる。出土物はすべて土師質および瓦質土器である。土器は二次焼成を受けていないため、火葬後に置かれ埋められたものと思われる。土器には破片もあるが積極的に破砕された状態を示すものではない。

火葬墓の分布

笠松遺跡は伊呂波川の段丘で最も高位に位置し、火葬墓はその段丘の縁辺に広がる。火葬墓の範囲は北側が河岸段丘の縁辺、東側が南方向に開析された浅い谷など自然地形で画されている。南側は広く平坦な可耕地と連続するが調査範囲でみれば、火葬墓の分布は伸びないようである。北西側については北地区の調査所見から分布の広がりは確認されていない。したがって、現状では北西～南東方向200m、幅30mの河岸段丘の縁辺を範囲に営まれた墓地といえよう。火葬墓の立地は可耕地の限界付近が選択され、耕作に支障の少ない点が考慮されたものと考えられる。

火葬墓の分布範囲内における位置関係についてみると、最も集中するのはⅡ区で、5m×8mの範囲に1号墓～5号墓の5基が造られている。このうち4・5号墓は重複する。この群の南12mに7号墓、南東17mに8、9号墓の2基が位置し、さらに同じ南東方向64mにⅠ区1号墓がある。Ⅲ区では5基が20m×25mの範

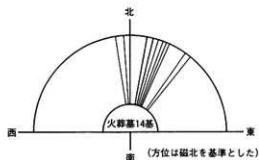


圏内に散漫な分布状況を示している。このように火葬墓群は大きくⅡ区、Ⅲ区の2群に分けることができよう。

主軸方位についてみると、磁北～北9度西（4基）、北10度東～北24度東（8基）、北35度東～北39度東（2基）の3群に纏められる。しかし同一方位を指向する火葬墓は必ずしも同一群に属するのではない。したがって、主軸方位のみを基準とした群の抽出には無理がある。しかも笠松遺跡の火葬墓は出土土器に時期差がなく、同一時期内に造営されたと考えられるため、複数の火葬墓の集中する範囲を群として、その中でも造営順序が主軸方位に反映されたものと思われる。

大分県における火葬墓の実例は、宇佐市吉松遺跡（註2）（文献1、2）、三光村美濃尾遺跡（註3）で確認されている。吉松遺跡では、11基の火葬墓が平野部の微高地上に造営されており笠松遺跡に近い立地条件を備えている。美濃尾遺跡は丘陵地の尾根上に形成された火葬墓群で溝や地山整形によって区画された3つに墓域をもつ。これらの墓地群はいずれも出土土器から15世紀後半～16世紀初頭に位置付けられ、この時期の火葬墓の展開が明確になりつつある。

一般的に火葬墓といわれている火葬を行った土坑については、遺体の処理施設としての機能に着目し「火葬土壌」と称し、本来の「墓」とは区別して捉える考え方がある（文献3、4）。このような観点にたてば、笠松遺跡の火葬墓は葬送の過程における一段階を示すものであろう。しかし、少なくとも人骨を残し、火葬後に土器を供献する事例が確認され埋め戻しも入念であるなどの点を勘案すれば、死者に対する儀礼の意味は十分に示されているものと言える。従って、この種の火葬遺構を広義の墓と考えたい。



第25図 火葬墓主軸方位分布図

註1 人骨に関する記述については、田中氏の所見（第5章）にもとづいた。

2 宇佐市教育委員会の教示による。

3 三光村教育委員会の教示による。

文献1 佐藤良二郎「宇佐の中世墓地」（『大分県地方史第137号』大分県地方史研究会1990年）

2 渋谷忠幸・佐藤良二郎（『中世墓地の地域的様相一九九一—304号』1988年5月）

3 石田彰紀「Ⅱ 火葬墓」（『尾道』熊本県文化財調査報告第12集、熊本県教育委員会、1973年）

4 中西研志「B 火葬土壌について」（『奈良尾遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第13集、福岡県教育委員会1991年）

参考文献

田中良之「中世の遺構」（『吉浜遺跡』下関市教育委員会、1985年）

2 掘立柱建物

掘立柱建物の配置は北、東を自然地形で画され、西側は分布の広がりが確認されていない。主軸方位に基づく建物の構成は3グループに纏められる。

I期の建物は1・2・4・5・7の5棟で、北32度東を中心とする主軸方位を指向する。この建物群は西方を南西から北東へ伸びる溝、北、東方を自然地形で区画された範囲に配置されている。調査で確認した建物群は北限付近に形成された一部であり、その中心はさらに南西方向への広がりが考えられる。建物1、2の東辺柱筋、建物4の北辺柱筋と建物5の南辺柱筋、建物5、7の北辺柱筋は通っており、一定の規格性が確認できる。建物の性格については総柱建物や平面正方形の建物はなく、この範囲内において倉庫は確認できない。I期の時期は出土土器から8世紀中葉に比定できる。

II期はI期と同一時期幅で包括できるが、柱穴の切り合いから後出時期と考えられる3、6、8の3棟である。建物の位置関係や柱穴の切り合いからみて、I期建物群の建て替え状況が窺えるものである。つまり、建物2が建物3に、建物5が建物6、建物7が建物8に建て替えられたものであろう。II期建物群は主軸方位をI期に対して東へ18度程偏する。建物の構成は倉庫と見做される例を伴わない。また井戸も確認されていない。

III期は建物9の1棟だけ確認されているが、調査区外に建物の存在する可能性もある。建物は溝で囲まれた範囲に位置し、溝の方向と主軸方位を一にする。III期は出土土器から13世紀前半代と考えられる。

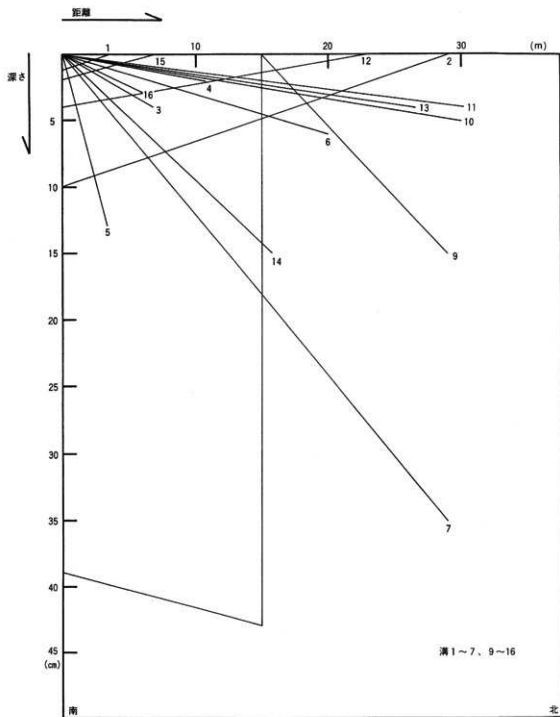
I・II期建物群については建物の方向、柱筋を基準に観察したが、未調査である西側地域に相応の建物の存在を想定した場合、その一部が確認されたに過ぎない。したがって、大型建物、倉庫の有無を含む建物総体の性格付けは課題として残った。

3 溝

南Ⅲ区で確認した16条の溝については、底面傾斜の状況を観察した。溝の方向については、15条中11条が北方向、4条が南方向へ傾斜している。しかし底面が概ね緩傾斜をなしていることから水量など管理を果す機能が想定される。また溝の集中する範囲には建物などがなく、明確ではないが耕地範囲における水利関連施設と思われる。溝の時期については、堆積土中から出土した遺物が古墳～中世と各時期にわたっており分明ではないが、近接地の溝の時期を勘案すると古代の可能性が高い。

番号	梁行×桁行 (m×m)	床面積 (㎡)	柱穴 (cm)		方位
			径	深さ	
1	2×3 (4.2×5.5)	34.6	22~65	10~30	北32度東
2	2×2 (2.6×3.5)	9.1	20~30	10~20	北31度東
3	2×3 (4.0×5.5)	22.0	40~65	20~45	北45度東
4	2×3 (3.8×4.4)	16.7	50~60	15~40	北35度東
5	2×4 (4.8×6.7)	32.2	45~65	25~55	北33度東
6	2×4 (3.8×6.8)	25.9	35~60	30~60	北50度西
7	2×4 (4.8×7.2)	34.6	25~65	10~40	北31度東
8	2×2? (4.1×5.3?)	21.7	30~40	20	北55度西
9	2×3 (4.0×5.8)	23.2	20~30	20	北23度東

第2表 南Ⅰ区掘立柱建物一覧表



第27図 南Ⅲ区溝底面傾斜図

第5章 自然科学的調査の成果

笠松遺跡火葬墓出土人骨

金宰賢¹⁾・田中良之²⁾

- 1) 九州大学大学院文学研究科博士課程
- 2) 九州大学九州文化史研究施設比較考古学部門

笠松遺跡では中世に属する火葬墓から人骨が出土した。人骨の保存は良好でなく、火葬のため組織の変形と破砕も著しかったが、埋葬姿勢の観察を第一の目的として、現地における観察・記録を行った。人骨は、樹脂注入を施した後取り上げられ、研究室において清掃を行ったが、原形をとどめる部位はほとんどなかった。したがって、人骨から得られる情報は全体として多くはないが、以下、遺構ごとに報告を行う。

南Ⅰ区1号火葬墓

出土状態 小型の墓壇で火のまわりもよく、人骨の保存は良くない。わずかに墓坑南に大腿骨と腓骨の破片が認められることから頭位が北であったとも思えるが、保存不良のため詳細は不明である。

人骨所見 火葬による細片化と骨の保存が不良であったため、部位が同定できたのは下肢骨のみである。まず、左大腿骨遠位端および大腿骨骨体の破片があるが、左右の判別は不能である。腓骨骨体片も左右の判別は不能であり、また腓骨片とも思える骨片が認められた。

以上のように、本人骨は保存不良のため、年齢・性別等の判定はしえなかった。

南Ⅱ区2号墓(第28図)

出土状態 比較的保存がよく、現地において人骨の位置関係を確認することができた。頭を北に向け、上肢をほぼ90°の角度で屈し、手を顔面の前あたりに置き、下肢も足首が股関節あたりに来るよう強屈し、身体を右に倒した右側臥屈葬の姿勢である。このような姿勢は火葬によって火を受けた際に生じた姿勢の変形という可能性も考慮する必要があるかもしれないが、頭から足まで墓壇ぎりぎりいっぱいに収まっており、本来の姿勢であるとみて大過ないだろう。

人骨所見 頭骨はいずれも細片化しており、部位の特定はできなかった。ただ、成人の頭骨にしてはやや薄い。

上肢は、上腕骨・尺骨・橈骨が左右とも認められるが、左上腕骨大結節稜および遠位端の他は部位は特定できない。また、肋骨片も認められた。

下肢は、左寛骨が残存していた。出土した段階ではある程度形態がわかる状態であったが、

取り上げ後は細片化し、復元は不能であった。大腿骨は左右とも認められるが、部位が特定できるのは右大腿骨骨体上部のみである。下肢骨は、脛骨・腓骨の破片が認められるが、左右も定かではない。

以上のように、遺存した人骨の量は比較的多かったものの、火葬により細片化しているため、性別・年齢は明らかとはならなかった。

南Ⅱ区3号墓

出土状態 比較的大きな墓壇で火葬しており、火のまわりが良いため、人骨の保存は不良である。人骨の状態は墓壇の中心に頭蓋骨と上腕骨の破片が残存し、そのまわりに大腿骨の破片が位置している。このような位置関係は坐葬であった可能性を示すが、保存不良のため全体の位置関係が不詳であり、詳細なことは不明である。

人骨所見 骨は細片化しており、頭蓋（側頭骨）片が確認されるが詳細な部位は不明である。そのほか上腕骨と大腿骨の破片が残存するが、やはり部位の判別はできない状態である。

以上のように、本人骨は保存不良のため、年齢・性別の判定はできなかった。

南Ⅱ区4号墓

出土状態 5号墓よりも下のレベルに位置し、頭位は北である。人骨の保存は良く、墓壇では椎骨と寛骨片が墓壇長壁に近接して位置している。上肢は強屈して右に倒した状態である。下肢も脛骨片が墓壇短壁と並行している。これらから右側臥屈葬と判定できるが、ただ大腿骨の遠位端と脛骨片の位置関係が本来のそれとは逆になっており、これが調査時の二次的移動でないとすれば、拾骨による移動の可能性もある。

人骨所見 頭骨は後頭骨・左下顎骨が認められる。胸椎片や寛骨片も残存するが部位の判定はできない。上肢は左上腕骨の遠位端と左上腕骨体の一部が残っている。前腕の骨片も認められるが部位が特定できるのは、右尺骨の近位端と遠位端のみである。下肢は大腿骨の破片が認められるが左右の判別は不能である。また、脛骨片も遺存していたが、やはり部位の特定はできない。

以上のように、保存不良のため本人骨の年齢・性別の判定はできなかった。

南Ⅱ区5号墓（第29図）

出土状態 4号墓を切って掘り込まれた火葬墓である。人骨の保存状態は比較的良好で、一部は位置関係を確認することができた。まず頭を北に向け、左上腕骨は胸の方に向けている。下肢は大腿骨と脛骨をほぼ直角に屈して左に倒してあり、全体的な状態から、左側臥あるいは仰臥の屈葬と考えられる。

人骨所見 頭骨は後頭骨片が残存している。上肢は左上腕骨の遠位端・右上腕骨体の破片が認められる。下肢は左大腿骨の破片が残存しているが、後面の粗線の部位は残っていない。脛骨の破片も認められたが、やはり部位の判定はできない。

以上のように、本人骨の年齢・性別の判定は不能であった。

南Ⅱ区6号墓

出土状態 人骨の保存は良くない。南の方向に大腿骨の破片が認められることから、頭位は北であったとも思えるが、保存不良のため詳細は不明である。

人骨所見 骨の細片化と保存不良のため部位の同定ができたのは右大腿骨近位端のみで、そのほかの破片は骨種の判別は不能であった。

以上のように、本人骨は保存不良のため、年齢・性別等の判定はできなかった。

南Ⅱ区9号墓(第30図)

出土状態 比較的保存は良い。人骨の位置関係は墓壙中央の頭蓋骨を中心にして、北側は上肢骨が、南側は下肢骨が位置している。このような位置関係は仰臥位ではありえず、むしろ坐葬で頭が落ちたものである可能性が大きいと考えられる。ただ、北側に頭骨片が認められるが、これについては拾骨の際に移動したものである可能性もある。

人骨所見 頭骨は頭頂骨片、矢状縫合とラムダ縫合および外後頭隆起付近の後頭骨片、左外耳孔付近の側頭骨が認められる。上肢は、右上腕骨遠位端と左右の判別が不能な骨片、右尺骨近位端、橈骨片などがある。下肢は大腿骨と脛骨、腓骨の破片も認められる。

頭蓋主縫合(矢状縫合・ラムダ縫合)は内板の閉鎖がはじまっており成年に達していたと推定される。また、後頭骨外後頭隆起は弱く、本人骨が女性であった可能性を示唆している。

したがって、以上から本人骨は成年女性の可能性が大きいといえよう。

南Ⅱ区1号墓

出土状態 保存は不良で、細片のみ存していた。人骨は墓壙の北西に頭蓋骨片があり、つづいて前腕骨と上腕骨片が腕を屈した状態で位置している。頭蓋骨・上肢の状態、墓壙の大きさ等から、仰臥屈葬や側臥屈葬の可能性が大きい。しかし、大腿骨片の一部が墓壙西側に位置しているが、原位置ではないことから、拾骨等による二次的移動によるものと考えられる。

人骨所見 頭骨は細片で部位の同定はできない。上肢は上腕骨と前腕骨の破片が認められるが、やはり細かい部位の判定はできない。下肢も大腿骨の破片が認められるが同様に部位の判定はできない。

以上のように本人骨は保存不良で、年齢・性別の判定はしえなかった。

南Ⅲ区2号墓

出土状態 保存は不良で、骨片が墓壇の南西側と北東側に認められたのみである。しかし、細片化しているため埋葬姿勢等については不明である。

人骨所見 判定不明の破片が残っており、大腿骨片と考えられるものが認められたが、年齢・性別は不明である。

南Ⅲ区3号墓 (第31図)

出土状態 人骨の保存は比較的良好で、墓壇内の位置関係が明瞭に観察された。頭を南西側にして、右上肢骨は強く屈して手を顔面近くに置き、左上肢骨も強屈して手を胸の上に置いた状態である。下肢も膝を強く屈しており、左側臥屈葬の姿勢であったと思われる。

人骨所見 頭骨は右眼窩上縁、右頬骨縁結節、右頬骨上顎縫合を含む部分、右外耳孔の部分、左外耳孔と乳様突起を含む側頭骨片、下顎骨の左右下顎頭と左筋突起、右下顎底と白後三角を含む下顎体が認められる。下顎骨の歯式は下記のとおりである。

M・M・M₁/P₁C I₁I₁ I₁I₁C P₁

○ ○ △ ○ ○ △ △ △ ○ ○

○歯槽開放 / 欠損 △歯根のみ

また、右耳小骨(ツチ骨・キヌタ骨)も認められる。脊椎は軸椎をはじめとして椎体と椎骨下関節面が残っている。左右鎖骨の円錐韧带結節付近の部分と肋骨片も認められる。上肢は右上腕骨の近位端と肘頭窩の破片もあり、左上腕骨体も残っている。前腕は右橈骨頭を含む近位端の破片が残存し、右の手中手骨も認められる。寛骨は残存するが細かい部位の判定はできない。下肢は左右大腿骨の近位端と右大腿骨遠位端の破片および左脛骨遠位端とその破片があり、腓骨の破片も認められるが細かい部位の判定はできなかった。また基節骨の破片もある。これらのうち左乳様突起は小さめで、それほど発達していなかった可能性を示すが、火葬による縮小が考えられるので性判定の基準とはしえない。ただ、椎体の状態と下顎の歯式をみても明らかに右第3大臼歯は萌出していた可能性が大きく、成人であった可能性が高い。

南Ⅲ区4号墓 (第32図)

出土状態 残存する人骨は比較的良好で埋葬姿勢を確認することができた。頭位は北で、頭蓋骨と下顎骨が認められた。さらに、下顎骨は正面に向かっており、これが原位置とすれば顔面を正面上方に向けた仰臥位であったと思われる。上肢は左上腕骨が墓壇の両長軸と並んでおり、胸の方に向かって左右前腕骨が重ねてあったと考えられる。下肢は立膝の姿勢であった

ものが崩落した状態をしている。これらから、本人骨は仰臥屈葬の姿勢であったと考えられる。

人骨所見 頭骨は乳様突起を含む右側頭骨片、右外頭蓋底の蝶形骨と頬骨弓の破片と部位不明の骨片があり、右下顎骨の筋突起と左側オトガイ孔を含む下顎体が認められる。下顎の歯式は下記のとおりである。

C I₁:I₁ I₁:I₂ / P₁:P₂:M₁:M₂

○△○ ×○ ○×××

○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ

左肩甲骨片と肋骨片も残存する。上肢は右上腕骨遠位端と左上腕骨体の破片が認められる。左右前腕骨の破片も残存するが、部位が判定できるのは左橈骨の骨間線付近の骨体のみである。寛骨の破片も認められる。下肢は左右大腿骨の近位端と右大腿骨の遠位端後面が遺存していたが、大小転子を欠く。ただ、左大腿骨で粗線の発達を確認できた。脛骨と腓骨の破片も認められるが、部位の判定ができたのは左の脛骨・腓骨の近位端のみであった。

これらのうち、乳様突起と大腿骨粗線の発達が認められたことから男性と判定される。また、上記の歯式のように下顎左大白歯の歯槽閉鎖からみて熟年～老年と推定される。

南Ⅱ区5号墓

出土状態 人骨の保存は良くない。頭蓋骨片の位置から頭位は北であったと考えられる。下肢は左右大腿骨片が墓壇の南に平行しており、その中央に左右不明の脛骨片と腓骨片が認められる。したがって、これらの位置関係からみて、仰臥屈葬であったと推定される。ただ、墓壇が雨によって一時冠水したことがあるため、多少の骨片の移動も認められる。

人骨所見 頭蓋は破片が残存するものの、部位の特定が可能なものはなかった。上肢も前腕骨と上腕骨の破片が認められるが、同様に部位の判定はできなかった。下肢は左右大腿骨の近位端があり、左大腿骨には発達した粗線を確認できる。脛骨と腓骨の破片も認められるが、部位がわかるのは脛骨前縁部のみである。

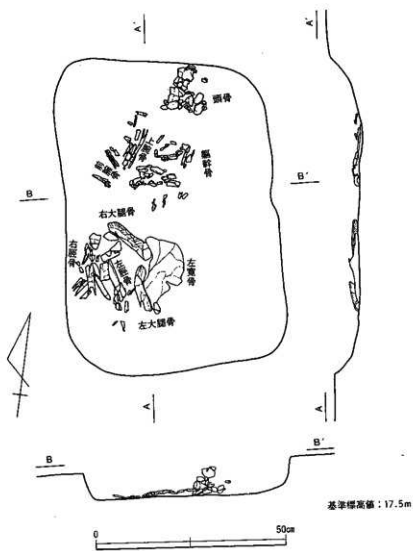
以上のように本人骨は保存不良であるが、大腿骨粗線の発達から男性であった可能性が高い。しかし、年齢については、推定のための部位が遺存しておらず、不明である。

以上、出土状態と人骨所見について記載したが、火葬のため保存状態が不良のものが多く、その情報量は少なかった。かろうじて埋葬姿勢はある程度は推定することができたが、左右の側臥屈葬、仰臥屈葬、坐葬と変異があり、一定していない。この点は、狭い墓壇ぎりぎりに人骨が位置する点とともに室町期の火葬土壇に共通しており、山口県下関市吉母浜遺跡において

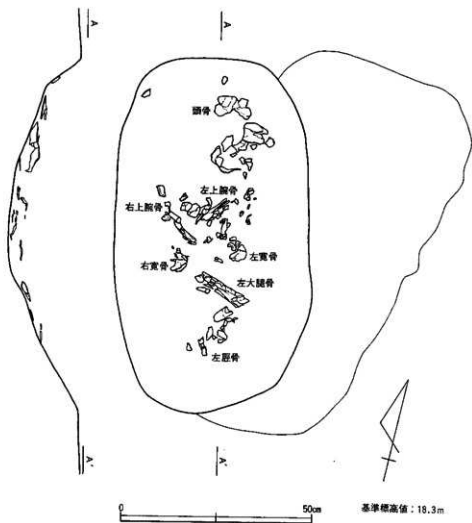
指摘されたように（田中1985）、同時期の土壙墓における埋葬姿勢とも共通するものである。

保存が比較的良好で埋葬姿勢が推定できたものでも、火葬の際にはほとんどの骨が細片化し、性・年齢が推定できたものはわずかであったが、性・年齢に偏りがあった様子は認められない。また、出土状態の図をみてもわかるように、ほぼ全身の人骨が墓内に遺存していた一方では、拾骨による二次的移動を示すと思われる事例もあった。前記の吉母浜遺跡では人骨の保存が良好であったため、ごく一部が拾骨され、残りは墓内に残されて、六道銭や土師器・アワビなどの副葬品も認められた。これは、火葬のための土壙が墓としても認識されていたことの証左と捉えているが（田中1985）、拾骨の状態からみても、本遺跡も同様の墓制であった可能性は高いといえよう。ただ、吉母浜遺跡では通称「喉仏」と呼ばれる第2腰椎（軸椎）が優先的に拾骨されていたのに対し、南田区3号墓では第2腰椎が検出されたことから、優先的に拾骨されてはなかった可能性を示している。1例のみではあるが、中世における火葬習俗と近・現代への連続性を考えるうえで、重要な所見となる可能性があらう。

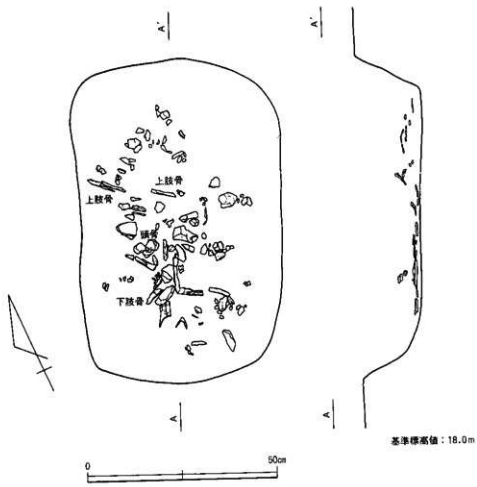
※田中良之1985「中世の遺構」『吉母浜遺跡』下関教育委員会



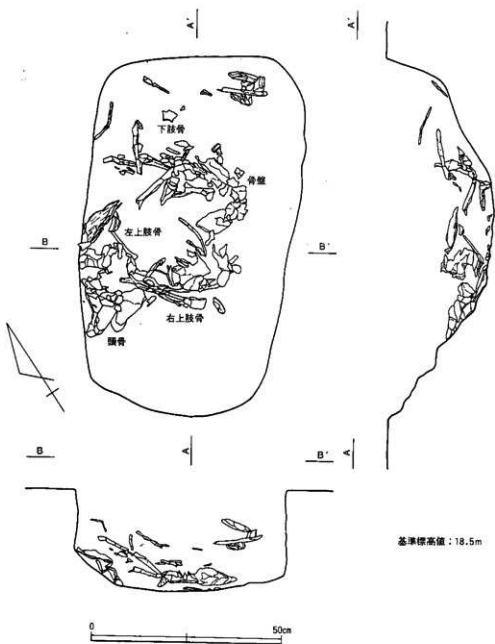
第28图 南II区2号墓人骨出土位置图



第29回 南Ⅱ区5号墓人骨出土位置図



第30图 南II区9号墓人骨出土位置图



第31圖 南Ⅲ区3号墓人骨出土位置圖

第6章 まとめ

宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告は今回を最初として引き続き刊行予定である。今年度は笠松遺跡について報告を行った。

本調査では、北大バイパスの大分県内路線では唯一現道拡幅を伴う工事内容であったため、範囲の幅が狭く、現道に接しており作業の安全確保、雨天時の排水作業などに苦慮した。

調査の内容については相応の成果があった。そのひとつが中世火葬墓である。現在中世墓地の調査は12世紀末の中津市草場遺跡^(文獻1)、13世紀～14世紀の三光村佐知遺跡^(文獻2)、日田市朝日宮ノ原遺跡^(文獻3)、宇佐市吉久遺跡^(文獻4)などの土坑墓、15世紀～17世紀におよぶ連続的な墓地形成がみられる緒方町千人塚遺跡^(文獻5)など葬送の実態が明らかになってきた。墓制の変化については15世紀末～16世紀初頭にみられる火葬墓の採用が画期として位置づけられるものである。このような現状の中で、笠松遺跡の火葬墓は中世墓研究の進展に好資料を提供したものとえよう。

古代の建物に関しては、南Ⅰ区の掘立柱建物にみるべきものがあった。限定された範囲の調査にとどまったが、建物の建て替え状況は、8世紀中葉に属する建物群の構成、性格を考える上で参考となる。今後近接する尾畑遺跡、向野遺跡などと併せて古代の集落形成を検討するに際し、一助となろう。

- 文献1 小林昭彦ほか「中津バイパス(4)伊藤田窟跡群」大分県教育委員会、1992年
文献2 坂本嘉弘『佐知遺跡』(大分県文化財調査報告書第81集)大分県教育委員会、1989年
文献3 土居和幸「朝日宮ノ原遺跡Ⅱ」(「日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ」)日田市教育委員会、1990年
文献4 佐藤良二郎「宇佐の中世墓地」(「大分県地方史第137号」)大分県地方史研究会、1990年
文献5 後藤一重・高野弘之「中野遺跡・千人塚遺跡」(緒方地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ)緒方町教育委員会、1990年

写 真 图 版

凡例

出土土器は押図番号と対応する
(第4図1→4-1)



北地区(現道部)溝 (北西方向から)



北地区溝9土層断面 (北東方向から)



北地区東半部 (北西方向から)



北地区西半部 (南東方向から)



南I区空撮(手前が北)



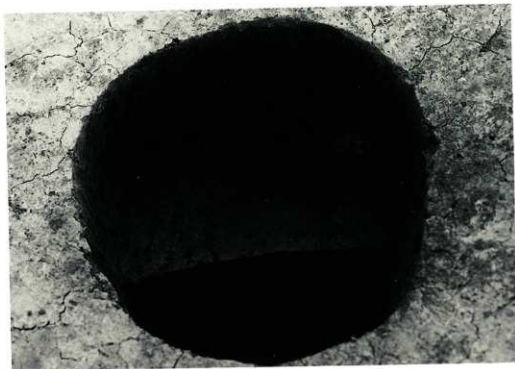
南I区東半部建物群(北東方向から)



南I区西半部建物群 (手前が北)



南I区南辺ピット群(現道部) (北西方向から)



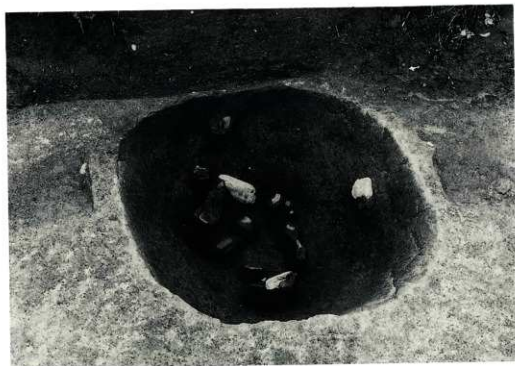
南I区建物5柱穴11 (南東方向から)



南I区建物6柱穴2 (北方向から)



南I区土坑3 (北方向から)



南I区土坑4 (北方向から)



南Ⅰ区火葬墓(南東方向から)



南Ⅰ区溝3(西方向から)



南I区溝4 (北方向から)



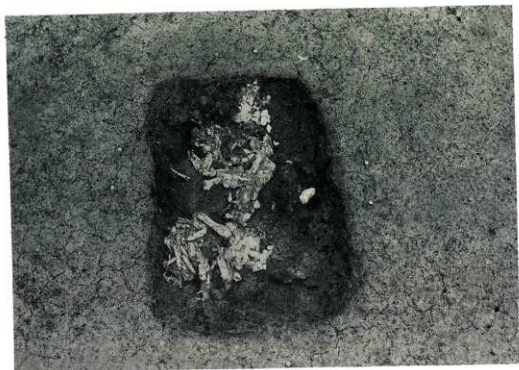
南I区溝5 (北東方向から)



南Ⅱ・Ⅲ区空撮(手前が北)



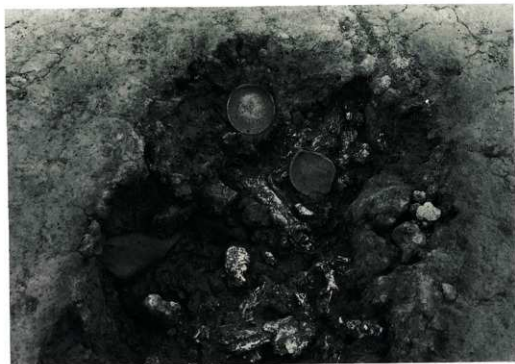
南Ⅱ区火葬墓群空撮(手前が北)



南Ⅱ区 2号墓 (南方向から)



南Ⅱ区 4・5号墓 (南方向から)



南Ⅱ区5号墓 (北方向から)



南Ⅱ区4号墓 (南方向から)



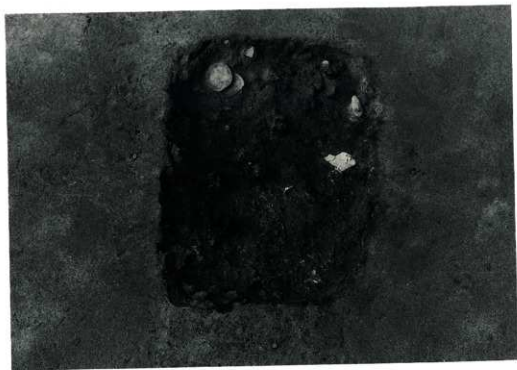
南Ⅱ区4号墓(西方向から)



南Ⅱ区6号墓(南方向から)



南Ⅱ区7号墓 (南方から)



南Ⅱ区8号墓 (南方から)



南Ⅱ区8号墓(南方向から)



南Ⅱ区9号墓(南西方向から)



南Ⅱ区9号墓(西方向から)



南Ⅱ区溝3(南方向から)



南Ⅲ区1号墓(南西方向から)



南Ⅲ区2号墓(北東方向から)



南Ⅲ区3号墓(南西方向から)



南Ⅲ区3号墓(東方向から)



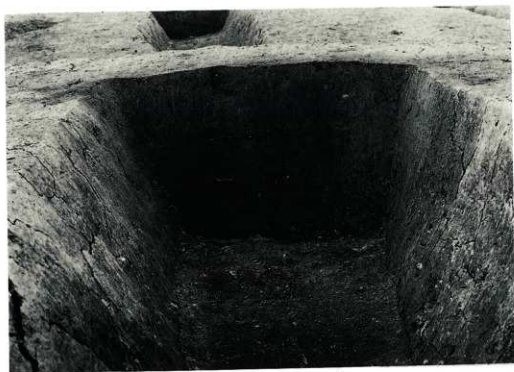
南Ⅲ区4号墓 (南方向から)



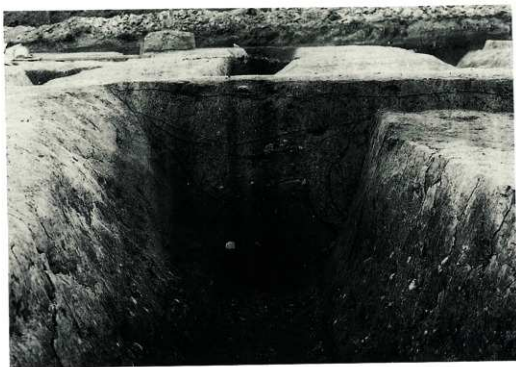
南Ⅲ区4号墓 (南方向から)



南Ⅲ区5号墓 (南方向から)



南Ⅲ区溝6土層断面 (北方向から)

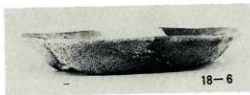


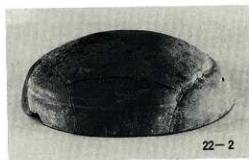
南Ⅲ区溝7土層断面 (北方向から)



南Ⅲ区南辺部溝10・11—右から— (北方向から)

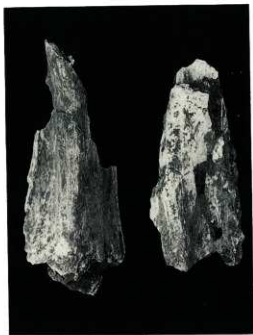








南Ⅰ区火葬墓 大腿骨



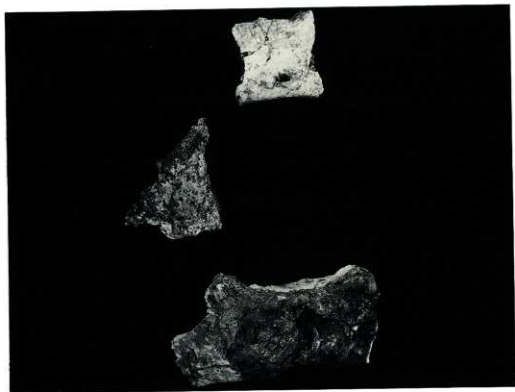
南Ⅱ区5号墓 左·右上腕骨



南Ⅱ区6号墓 右大腿骨



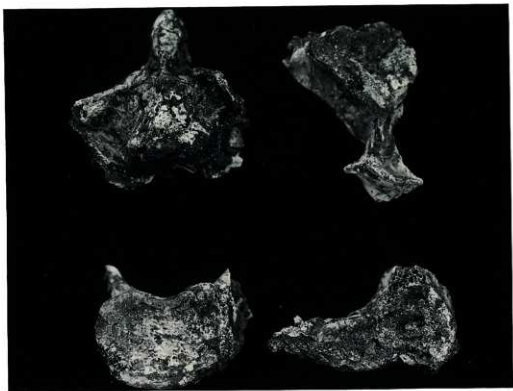
南Ⅲ区3号墓 右上腕骨と桡骨



南川区3号墓 右頬骨と眼窩上縁



南川区3号墓 下顎骨



南Ⅲ区3号墓 椎骨



南Ⅲ区4号墓 右乳嵴突起



南Ⅲ区4号墓 下颌骨



前面



後面

南Ⅲ区4号墓 左·右大腿骨

REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
REQUIRED BEFORE THE CONSTRUCTION
THE USA BYPASS

KASAMATSU SITES

A REPORT OF THE EXCAVATION
OF ANCIENT AND MEDIEVAL SITES
IN OITA JAPAN

CONTENTS

- I Progress of reseach work
- II Geographical and historical environment
- III Excavation of Kasamatsu sites
- IV Study of structure
- V Natural scientific study
- VI Conclusion

English Summary

OITA PREFECTURAL BOARD OF EDUCATION

1993

SUMMARY

This report is the result of investigation of the kasamatsu Site that was required prior to the construction of the Usa Bypass.

The staff of the Oita Prefectural Board of Education carried out the excavation in 1987, 1988, 1990, and 1992.

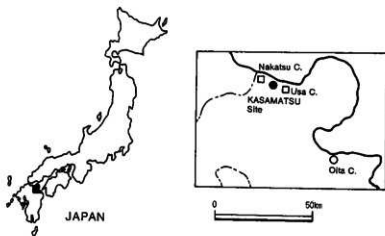
The position of this site is Kasamatsu, Usa City in Oita Prefecture (N.Lat.33°32'14", Long.131°17'30"E.) .

The square measure of the area we excavated was 7900m² . We found buildings with pillars imbedded directly in the ground in the 8th. Century, and Cremation Graves dating from the late 15th. Century to early 16th. Century.

1) CREMATION GRAVES 15 were found in the Kasamatsu Site : The features were located in 80m . long, 10m . wide site on the edge of a riverside hill. In distribution we found 2 groups (see fig.24) . In each group there were some cases that the corpse features had different direction and overlap. They were almost rectangular pits, measuring 1m . ×0.6m . used for cremations. Parts of the bones of the cremated corpuses were removed and interred in another place or structure. In the another case, a corpse was cremated and buried in the same pit. In the former case, these pits were covered with soil and some pottery. One grave separate from the groups had a square shape, but had contained no bones. This case perhaps was a sample of a different burial system. Cremation was brought to this area some time from the late 15th. Century to early 16th. Century. We found other illustrations of the Yoshimatsu Site in Usa City, Minou Site in Sankou Village, which is located north west from Usa City. There are graves with the same features in Fukuoka, Kumamoto, and Yamaguchi Prefectures. According to one school of thought, cremation was introduced by the Jodo Sect of Buddhism. It is a noticeable instance of Religious activity and / or beliefs influencing burial customs. The status of the person buried is not clear. Archaeological remains signifying the status of the person buried were not found.

2) BUILDINGS had their pillars directly imbedded in the ground. We know that Japanese Ancient Buildings show situations of politics and management of regions by the central government of that time. Concretely we decided use the scale, volume, position which official institution or usual dwelling clusters of that period. It is the base for official character that we

found ink grinding slabs, potteries with inscriptions in black ink and coins in post holes. We found 9 buildings, 8 of them were made the 8th. Century (Early Nara Period) . At first five buildings were made, the second time 5 new buildings were made that have different directions from the former buildings. According to archaeological remains in the features, it was during a short time that these buildings were constructed in two stages in the middle of the 8th. Century. These buildings of the Kasamatsu Site are located in the north area in total distributions of features. Because of this we think the Kasamatsu Site extend in the north west area. We have data in this that 8 middle scale buildings existed in the narrow. These buildings had Sue pottery of smale size shapes believe this site was the usual dwelling cluster.



一般国道10号線

宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

平成5年3月20日 印刷

平成5年3月28日 発行

編集 大分県教育庁管理部文化課

発行 大分県教育委員会

〒870 大分市府内町3-10-1

印刷 株式会社大分美術印刷センター
